

# 別冊 おなご



第三十回 千三忌

春のいぶき

chie kodama

33号

2015・3



別冊・おなご 33 ・ 目次

セキさん	.....	1
駄句三昧	.....	
— 第三十回千三忌に寄せて —	.....	2
沖 縄	.....	7
ノーモア戦争	.....	9
父たちの戦争	.....	15
ヴォイナ (戦争) という	.....	
名前の女の子	.....	22
戦争、そしてテロ	.....	25
満州の恩師との再会	.....	29
義父の遺言	.....	31
「放たれた鳩」(三)	.....	35

千三忌と保温シートから	.....	八重樫 励子	.....	39
桐のダンスの中から	.....	児玉 智江	.....	41
「台湾の旅」				
— 原住民族と霧社事件 —	.....	宮崎 順子	.....	44
平和へのバトン	.....	山本 栄子	.....	50
鶴彬と井上剣花坊	.....	佐藤 岳俊	.....	55
「戦争」を読む・15	.....	斎藤 彰吾	.....	68
「『いまどぎさういう歌をうたうのは 何事だ!』って怒られたの」	.....	押切 郁	.....	80
あとがき				
「和賀の15年戦争」	.....	小原 麗子	.....	98

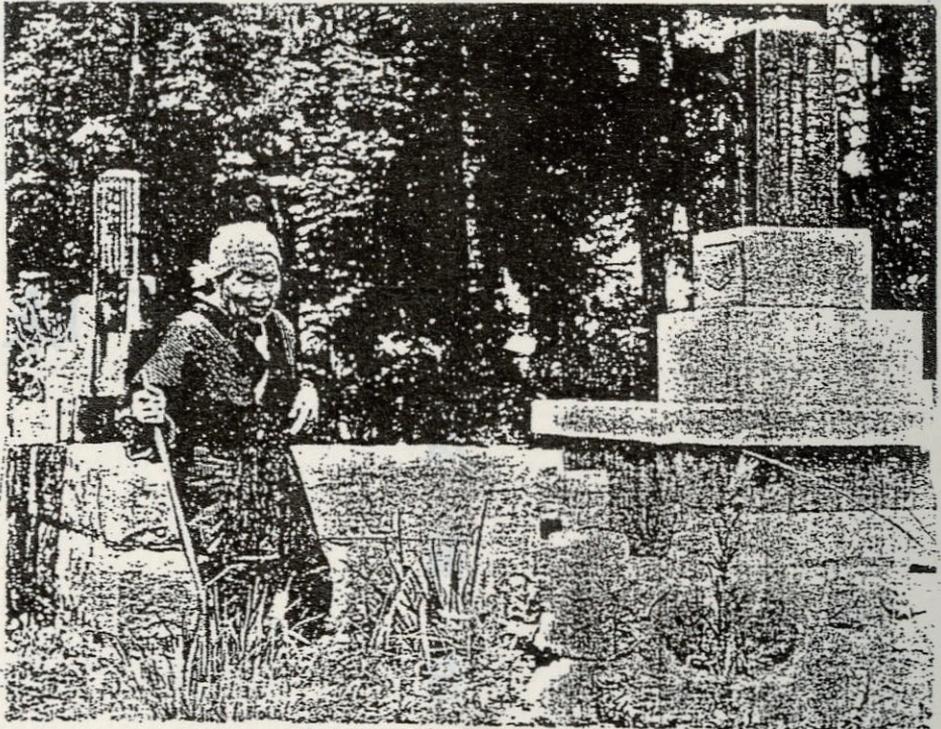
表紙・児玉 智江 / カット・小原 麗子

セキさんはネ ホントに  
 背の高いカーツとすた人でナ  
 見れば顔又な  
 いつもニコニコでナ  
 いや味 言われでも  
 その場でおさめでナ

えっつも こんど  
 ほうほうど 燃やすて  
 眼めちめちとすてる人たっつたどモ  
 煙りはりてなく  
 息子征<sup>だ</sup>して  
 息子に戦<sup>な</sup>死<sup>な</sup>れて  
 泣いてるんじゃないかい  
 子どもルにも  
 / そう 思<sup>っ</sup>た<sup>っ</sup>た。

へ小原昭さん  
 火<sup>火</sup>言<sup>言</sup>へ

高橋セキ 1966年：2月23日没



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に  
 少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば、  
 戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られて  
 しまふべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだす」  
 と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

小原徳志著 『石つかに語る母たち』 棘社刊より

駄

句

三ざん

味まい

— 第三十回千三忌に寄せて —

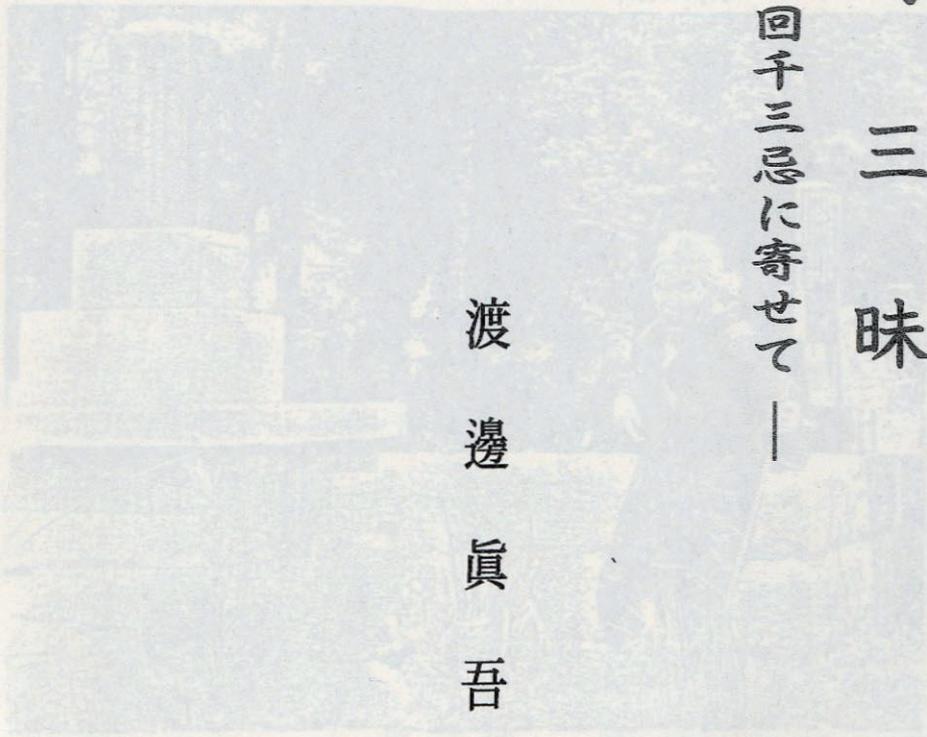
渡  
邊  
眞  
吾

千三忌の次第が進んで

最後は恒例の駄句の会

このひとときの静寂が好きだ

当日の加藤さんのお話



「和賀の十五年戦争」は感動した

後藤野飛行場と言うのがあった

中学生だった私たちも

勤労奉仕に動員された

ある日 格納庫にある練習機を

見学した

意外に小さいものでがっかりした

敗戦六日前の八月九日

特攻機三機四名出撃

二機三名は還らなかつたと言う

(後藤野のトンボはどこへ行つたやら)

今の常盤台に

國産経銀工業岩手工場と言うのがあった

粘土からアルミニウムを採り

飛行機の原料にすると言う

私たちも校庭に整列し

行進しながら現地に行った

粘土掘りだった

空には真夏の太陽があつた

昼食に塩をまぶした握り飯一個

全員に配られた

光る白米の一粒一粒を涙のように

今も忘れない

八月十日の空襲で工場は全滅し

作業員二名が死んだ

(経銀のアルミのコップで水を飲む)

中島飛行機黒沢尻疎開工場と言うのもあつた

軍用機を作る大きな会社だった

和賀の中学校や国民学校に分散し

特攻軍用機「<sup>つるぎ</sup>剣」を開発

試作機が出来た

私の祖先が眠る墓地の森にも

迷彩した倉庫がひっそりと建っていた

工場長の息子が同級生だった

曾山に住んでいたが

戦後間もなく東京に帰っていった

色の白い背の高い少年だった

(中島の「<sup>つるぎ</sup>剣」は散ってどんどはれあ)

徒労だった

蕩<sup>とうじん</sup>尽だった

空しかった

鼻の下に葱二本

ハナタラシだった少年時代

私の村にもあった十五年戦争

それから

心に傷を受けて

日中戦争から帰還した父を囲んで

家族七人

汗を掻き恥を掻き

喰えるものは何でも手掴みで喰って

生きるための

本当の戦争が始まった

(加藤昭雄氏講話「和賀十五年戦争」を参考)

# 俳句 沖繩

佐藤 恵美



h. 20. 10. 13

春荒れや送迎デツキ案じ顔

一万米上空に座し新茶汲む

強東風や守札の門に立ち尽くす

夏兆す朱色のいらか光る那覇

天地水身を委ねたる春の旅

エーサーを踊る墓地あり嘉手納基地

ガマの闇 (洞窟) 「集団自決」 春愁ひ

サーフィンや一万柱眠る海

泡盛や懐旧の情春の宵

蕨 恵 美

花盛り蔭に九条ゆらぎおる

西表島恋の山猫轟けり

デイゴ咲く珊瑚の島にオスプレイ

青葉島夜通し耳に西表島

風光る八重山の海マングローブ

イスラム国戦いたいてふ男郎花

餅花や銃をもたずと問われけり

ジュゴン住む辺野古の海の春愁

果てしなき海原翔る黒揚羽

腰かがめパイヤ畑うちなんちゆう

春怒濤撃沈されし疎開船

春荒小舟を吹返マツチ案じ願

# ノーマア戦争

田村浩志

## 1. プロローグ

数年前、特に第二次安倍政権になってから日本と中韓を軸にした国際関係が緊張した状態になっています。更に、アメリカとの絡みで状況は一層複雑で次第に抜き差しならぬところに来ていると思われれます。いまの日本は先の第二次世界大戦前夜を彷彿させると多くの識者が論評し、新聞の一般投書にも危険な状況を危惧する意見が頻繁に述べられています。集団的自衛権の行使が閣議決定で容認され、実質的に特定秘密保護法がその裏支えをする構図が見える状況を私も憂いている一人です。外国からの武力攻撃が起こって国民の生命、自由および幸福

追求の権利が覆されるような事態になった時に必要最小限の武力的措置を取りうると政府は言っています。しかし、国民の基本的な権利が侵されるといふ判断は内閣の秘密隠匿を許容する特定秘密保護法のもとでは一般国民の手許にはないものと考えられます。私は現在の閉塞感が広まりつつある社会状況下で、どのように考えるのかと自問してみました。

## 2. 軍国少年であった頃

私が誕生したのは昭和十二年の東京。日本軍が盧溝橋を爆破し日中戦争が勃発した年です。十六年には太平洋戦争が始まり、物心ついたときには世の中はすでに戦争

気運で満ちていました。大人の男は戦闘帽そして足にはゲートルが普段着、女の人はモンペに割烹着でした。子供の遊びは戦争ごっこ、たまにはチャンバラでした。幼児なりに色々な軍歌をおぼえました。「敵は幾万ありとても・・・」、「海の男なら・・・」などなど外でも家の中でも得意げに歌っていました。近所の友達と「お山の大将われひとり・・・」と歌いながら遊んでいると、通りがかりのおじさんが頭をなでしてくれることもありました。

### 3、学童の頃

幼稚園は穏やかな雰囲気でしたが、国民学校に入った途端、緊迫し、緊張した日常に変わりました。特に学校に一人いた配属将校が怖く、朝礼では校長先生のお話の中で、「天皇陛下は・・・」、「と天皇が引用されるたびに足を引いて踵を合わせ、両手の中指をズボンの横の縫い目に合わせて伸ばし、直立不動の姿勢を取らなければなりませんでした。そうしないと、巡回中の配属将校に見つかると「お前たちは・・・」とビンタを食らいました。一年生坊主は殴り倒され、歯を食いしばって泣くのを耐

えたものでした。担任のN先生は「お前たち皇国少年は天皇陛下のために死ぬのだ。その時には天皇陛下万歳と言って死ぬのだ」と言い、私はその気になっていました。体操の時間は軍事教練が多く、木製の銃の先に布玉を付けて前方の疑似敵の人形目がけて突進したり、赤白の帽子をかぶって騎馬戦で競い合いました。でも、少しも嫌がらずに戦闘訓練をむしろ楽しんでいました。やがて校庭が父兄たちで耕され広い畑になりました。山東菜、小松菜、大根、蕪など様々な野菜が育ち、父兄が交代で散布する生肥で風向きによつては学校中に臭いが漂つたのを覚えています。我が家が靖国神社に比較的近かつたためか、次第に上空にB29やグラマンの編隊が現れるようになってきました。そんな時には各家の床下に掘った防空壕に避難しました。夜の上空にB29の編隊が現れた時、三筋の探照灯が機影を捉え、高射砲から砲撃しましたが、砲弾は遙か手前でさく裂し、飛行機には届きませんでした。近所で焼夷弾が投下されるようになって、一年生の六月に父母の郷里である岩手県中部部のH町に疎開しました。立川の飛行場に徴用されていた父を東京に残して、父の実家である魚屋の二階の一室に間借りしての生活でした。

#### 4. 岩手での生活

H町の生活は長閑でした。軍国教育ではありましたが、軍事教練はなく、広い校庭を駆け回り、夕陽が綺麗だと眺める余裕がありました。一年生の時、好きだったY先生から「君たちは誰のために勉強するのか」と問われ、「天皇陛下のためです」とか「親のためです」と答えると、先生は笑顔で「勉強は自分のためにするのだよ」と論してくれました。まさに目から鱗でした。H町にはいとこも多く、楽しい生活でした。ごく稀でしたが、上空を敵機が北に向かって飛行することもありました。そんな時でも防空壕に入ることもなく、友達と連れ立って近くの城山に登って飛行方向を眺めたりしていたこともありました。M市の方向から爆弾の炸裂音が聞こえることもありました。田舎のせいもあってか、大根の葉交じりでしたが不自由なく米のご飯を食べることが出来ました。そのような生活の中に私のその後を決定づける重たい現実を味わいました。

// 二年生の五月に、近いところに住んでいた友人K君の父親が徴兵され出征しました。県信連で働いていて眼鏡

を掛けた優しいおじさんでした。出征の日に私はクラスの代表の一人として、日の丸の小旗を揺らしながら町外れまで行進に参加しました。「勝ってくるぞと勇ましく・・・」とか「見よ東海の空明けて・・・」などと軍歌を大声で歌いながら行進しました。K君は隣村にある駅まで行進を続けました。しかし、それから二か月後、K君のお父さんは白木の箱に入って帰ってきました。私は町外れで迎える集団の中にいましたが、K君を先頭に駅から数人の付き添いの人たちがやって来ると、迎える集団は町長をはじめ町の有力者たちが一斉に両手を挙げて「万歳、万歳」叫び始めました。K君は終始うつむいていました。亡くなつて帰還した人にどうして万歳と祝うのか、私はその場に違和感を覚えました。戦争中に秘められた不条理を察したのかも知れません。或は風雲急な不安を感じ取ったのかも知れません。友人の幸せを奪い去つた戦争になんとなく疑問を抱いた始まりでした。それから僅か一か月後、広島・長崎に「新型爆弾」が投下されて日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏をしました。それからの世の中の身の変り様に唾然としました。学校の先生たちも民主主義を口にするようになり、翌年の三年生の時には男女共学になりました。中には資

源量の遙かに勝るアメリカに勝つ筈がなかったのだ、と言う先生もいました。子供心にもそれならなぜ戦争を仕掛けたのだろうか、と思つたものでした。

その後の民主主義を、学童としてまた中学生として穏やかに謳歌しました。M市の高校に汽車通学をしていましたが、車内で雑誌「世界」や「文藝春秋」などを熱心に読んでいる労働者風の人たちがたくさんいました。誰に憚ることもなく自由に本を読める、貧しいながらも明るい時代を貪つているようでした。高校の校歌は軍歌軍艦マーチのメロディーに「明治十三年春半ば」と独自の詩を付けたものでした。入学早々に講堂で始まった応援歌練習が嫌で仕様がありませんでした。上級生たちは木刀や竹刀で床をドンドンを鳴らして蛮声を挙げる様子に学童の時の軍事教練がダブリ、明らかなアナクロニズムを感じました。しかし、クラブの雰囲気はリベラルで、大言壮語をする者もいましたが、戦争反対を口にするものも少なからずいました。岩波新書や文春などをいろいろ読んでいるクラスメイトもいました。私は生物部に入り、むしろのほほんと学校の周辺で自然観察を楽しんでいました。大学は同期に全学連委員長の唐牛健太郎君がいて、私たちのクラスにもよくオルグに来ました。安保

反対のデモにも躊躇なく参加しました。戦争反対を口にする学生が圧倒的に多い時代でした。

## 5. 戦争はなぜ悪なのか

戦争を好む人は極めて少数である筈なのに、どうして世界中に戦争は絶えないのでしょうか。特定の国を想定して、A国がこうしたから、B国がああしたから、と政治家たちは自国の政治的対応策を打ち出します。しかし、この様な対処療法的な動きを続けている限り、この地球上から戦争はいつまでもなくならないと思います。現在の政治家の対応はゲーム化していると考えざるをえません。なぜ戦争はいけないのか、私は単純に考えることにしています。

先ず、戦争は殺人行為であることをはっきりと認識することが大事です。しかも、死刑執行と同様に合法的な殺人行為です。従つて、軍隊は殺人集団で、兵士は殺人者と言うことになります。出征兵士を戦場に送ることは殺人をして来い、と命令することに他なりません。戦場で殺人を拒否し、或は出征を拒絶すれば、直ちに国家反逆罪で重罰を被せられ、ときには処刑されます。平時で

あれば、殺人を犯せば厳罰に処せられるし、被害者の人数によつては死刑にもなります。本来ならば重罰に相当する殺人が戦争では法的に許され、兵士にとつては唯一の任務であることの間の乖離に私たちは一国民としてどのように対応するべきなのでしょう。それには戦争放棄を高らかに世界に向かつて宣言するのが一番だと考えられます。日本は今まで七十年もの間、憲法第九条を掲げて曲がりなりにも平和を維持してきました。これからも、戦争によつて誰も殺さず、殺されず平和で幸せに進んでもらいたいと願います。そのためには強引な憲法解釈で保有してしまつた戦争手段を順次なくしていくことが大事だと思ひます。しかし、このようなことを言うと、ではC国やK国が攻めてきたらどうするのか、など金科玉条のように混ぜ返しや潰しが浴びせられます。では、どのように対応するのが良いのか私の考えを手短に列記します。

## 6. 平和外交の勧め

### A. もし明日論

「もし明日」論を封じるためにはいつから一切の戦争

手段をなくすのか、例えば十年後とか二十年後とか期限を明言し、先ずもつて「もし明日論」が入る余地を封じる必要があります。そして個人的には、ブレることなくあらゆる選挙の機会に戦争放棄を訴える候補者に一票を投じます。かつて、「教え子を再び戦場におくるな」のスローガンで世論を喚起したように、現在の時宜にあつた説得あるスローガンを創出することも望まれます。護憲を良しとする人たちがもつと多くなり、憲法第九条堅持の立場から平和主義の理想を分かり易く訴え続けることが肝要だと思ひます。一方、国民のための軍隊は必要だとする論理を唱える人たちもいます。しかし、平和主義の立場からすれば、それは戦争があり得ることを前提とした論理で、邪道であると言わざるを得ません。戦争が起る余地を残してはならないと思ひます。

### B. 積極的な平和教育の推進

大学では平和学、国際交流学を学び研究する学部を多く設置し、英語圏のみならず他の地域でもその言語を駆使して様々な国の人々と接することが出来る学生を育成し、平和交流を展開することを期待します。そのような人たちに活躍できる場を作り広げることが望まれます。平和主義の立場を理解し、自信をもつて展開できる若者の

育成が大事です。そのためには多大な費用を要します。しかし、そのための財源は「軍備」を年次計画に基づいて削減すれば、十分に上に確保を出来るはずです。

### C. 平和主義外交官の育成

複雑な利害が交錯する外交の場では十分な素養を備えた多くの優れた外交官が不可欠です。軍事力を背景にした嘘っぱちの「積極的平和主義」ではなく、軍備のない本当の「積極的平和主義」を世界に向かって説く専門家が必要です。外交官の登用に際して平和に対する信念を正すことも大事です。軍縮、武力放棄のシナリオをリーダーシップを持って進めることが出来るのは憲法で武力放棄を宣言している日本だけです。

### D. 破壊に対する弁償

いま、戦争終了後には、人命のみならず破壊した建造物などの財産や文化財について、敗戦国が破損に対する請求をされるようになっていきます。しかし、人類が営々と築いてきた財産を破壊した責任は戦った双方にあります。戦勝国、敗戦国を問わず、双方が破壊した分に応じた補償を負うべきだと思います。日常の生活でも、喧嘩をして壊したものは双方が応分の補償負担をするのは当たり前のことです。そのような取り決めを国連なり何ら

かの国際機関で締結できれば、武器製造の価値観が変わり、軍縮への一里塚に繋がるのではないかと考えます。

## 7. エピローグ

私は外国に行つて人びとに接したとき、日本に対するリスベクト（敬意）を感じるものが少なからずありました。広島や長崎に対する同情もありますが、日本が平和憲法で憲法第九条を持つていることに對する安心感や信頼感が大きいと考えています。これからも本当の平和主義を大事にすることが日本の責務だと思います。

しかし、いま、この寄つて立つ基本的な立場が危うくなつていきます。私たち国民はこの方向に「ノー」の合言葉突き付けなければならぬと思います。自信をもつて向かう、揺るぎのない平和主義への新たな一歩が望まれていることを再認識することが大事ではないかと考えます。

# 父たちの戦争

北原陽子

歩<sup>ふ</sup>

朝の光がその名を指していた

八月十五日の終戦を知らず

中国東北部を更に北に向かつて

敗走した父達

剣も銃もぼろぼろになって

屍の脇を歩き

捕虜となった

厳しい寒さと飢え

過酷なシベリアでの強制労働

この夏

死んだ父と会った

古本屋で夫が手にした

「満州二〇一部隊の悲劇」

巻末の生存者名簿に父の名があった

菊地志郎

舞鶴港に降り立つたとき

父は自分の戦場を閉じたのか

どこまでも続く満州平野で寝ころび

胸深く吸い込んだ空

「遙かな彼方まで蒼かったよ」

「俺たちは将棋の駒だった」

一人一人が歩ふだった」

そう語った横顔

父は父の戦争の全てを語らなかつた

語らないまま

この世を去っていった

自分たちを戦場に送つたもの

今また「美しい国」の旗と

将棋盤を持ち出すものたち

父が私に会いに来たのだ

重く長い沈黙を破って

満州第二〇一部隊

戦場から帰らなかつたものたちが

歩いてくる

歩ふの人間が歩いてくる

強い声を発する 一人一人の人間が

ここから指すのだ

一手・・・一手・・・

戦争をしたがるものたちを

人間を歩ふにして動かすものたちを

追い詰めるのだ」

この夏 父に会った

たくさんの死んだ父たちに会った

この詩を書いたのが二〇〇八年・第一次安倍内閣（二〇〇六年九月から二〇〇七年八月）が戦争のできる国に突き進む本心を隠し、盛んに「戦後レジームからの脱却」とか「美しい国」を標榜にしていた頃である。その

言葉も、熱弁をふるうその姿も嫌だった。

その夏、古本屋で手にした本によって私は、死んだ父と会うことができた。そして父が生前「俺たちは将棋の駒だった。一人一人が『歩』だった」と語った言葉を思い出した。

私が大学生の頃、父に「なぜ、戦争に反対しなかったか」と問いつめ、「天皇にも絶対責任がある」と言うところ、父は激昂し、「んだがら戦後の教育はためなんだ。あの時代のごど何もわがらねで・・・あの時代を生きだ者にしかわがらね」と言い放った。

七年前、戦争と平和について学ぶ旅で、中国を訪ねることになった折、父が満州に行ったことをその会の代表の方に話すと、「じゃああなたの父さんもこれした口だな」と人を剣で突く真似をされた。それは人を殺したということだった。それまで考えたことがなかった私は大きな衝撃を受けた。しかし、冷静に考えると父は戦争に行つたのだ。戦場に行つた人間なのだと深く想いに至つた。

父は父の戦争の全てを語らなかつた。語らないままこの世を去って行つた。「俺たちは将棋の駒だった」と言

つた父の横顔を、私はたまらなく悲しいものに想う。

「あの時代に生きた者にしかわからない、戦場に行つた者にしかわからないさ」と言い放つた父の心の奥底。張り裂けそうな苦しみや辛さを背負つてその後の人生を生きたければならなかつた、たくさんの父たち。誰が償つてくれたのだろうか。

その父たちを戦場に送り、自分たちは、危険な戦場には行かず、駒を操あやつていた人々は戦後、政治家とし、復活し、その孫は、中国や韓国を逆なでするように靖国神社を参拝し、「英霊に尊崇のまことを捧げる」などと言つたり、「日本を再び輝く国へ」と声高に熱弁をふるつているのである。

父たちの戦争をもっと考えなければと書き出した一月十七日、テレビでエジプト訪問の首相の演説を聞いて、私は耳を疑つた。

「ISILと闘う周辺各国に総額二億ドルの支援を約束する」と勇ましく語つていたので。

この首相はやはり、日本国憲法の前文を理解していない。歴史を学んでいない。外交におけるスピーチの影響を考えていない。何故今、そこでそんなスピーチをする

の。外交心理への無神経ぶり・・・あぶないと思つた翌々日、案の定、「日本人人質」のテロップと凍りつくような湯川さんと後藤さんの映像が流れた。二人の尊いのは、日本人の悲痛な祈りと願ひも虚しく、安倍政権の水面下で、関係各国との情報の確認と情報の収集と情報の分析と情報の共有と情報のチャンネル・・・情報情報の中に非常なテロリストに奪われてしまった。

二人が拘束されてからこれまでの経過とともに政府の対応がどうであつたかしかしつかり検証されるべきだと思ふ。思慮深くない、首相の演説によつて、日本人は思つてもみなかつた危機に今、立たされた。イスラムを名のる過激派から「悪夢は続く」との宣告、すべての日本国民がテロの対象となつてしまったのだ。この重大なリスクを国民に背負わせたスピーチを反省することもなく、「ISIL」を連発し、「テロと戦う」「テロリストに過度な気配りをする必要は全くない」「罪を償わせる」と怒りをあらわにし、語気を強め、好戦的であつた。あまりに残酷で、惨い結果に、日本中が声を失つた。日本は重大な岐路に立たされたと思う。日本は何を大切に、どこに向かつて歩けばいいのか。

そもそも、二〇〇三年に始まつたイラク戦争に加担し、小泉首相が国際貢献の美名のもと、サマワに自衛隊を派遣したことで日本に対する印象が微妙に変わつてきたと言われている。アメリカのイラク戦争が、その後にフセイン時代の軍人たちを過激派にしたという指摘もなされている。そしてシリアの内戦・・・中東地域の歴史的背景や絶え間のない戦火に生きている人々に私たちはあまりにも無知である。

岩手日報一月二十五日付けでジャーナリスト玉木英子さんのシリア報告がある。「最前線に女性も手に銃」の見出しで「シリアが内戦に陥つてからまもなく四年、二十万以上の命が失われ、六百万を超える人々が家を追われた。イスラム国の台頭、米軍などの空爆。事態はより悪い方向へと進んでいる。「元のシリアはもう戻つてこない。さすがどうなるのかも分からない」「コバニに残る老人がそう言った——」。激しい戦闘で灰色のがれきの町になつた写真とともにその記事を読み胸が締めつけられる。

何年か前の正月に、私はアメリカに住む、パレスチナの女性が、その美しい瞳から涙を流し、道ゆく、アメリカ

カの人々にイスラエルによる「パレスチナ・ガザ」地区の空爆をやめて！」「子どもたちを殺さないで！」と、訴えているテレビを見て胸を締めつけられた。そのイスラエルにも今回首相は訪問しているのだ。新聞には、この武力攻撃で昨年夏だけでも二千人以上の犠牲者をだしているという報道があつたのに。二千人の人たちが死んでいる。そこには二千人の人たちの憎しみが芽生えてはいないか。なぜテロが生まれるか、このことからわかると思う。戦争が憎しみを生み、難民をつくり出し、貧しさを拡大させているのだ。このことを深く掘り下げなくてはテロはなくならないと思う。貧困と格差・・・私がこのことを考えたのは、ペルーの日本大使館の人質事件だった。日本人を人質に立てこもった犯人たちのリーダーについては分からないが、その多くがコーヒー栽培だけでは食べていけない層の人たちで政府への不満をいだいていた人たちであることが報じられていた。貧しいからテロリストになつていい訳はなく、人の生命を盾にした犯罪は絶対許されない。しかし、少なくとも、この大使館に集まつた人たちのように、大学に行ったエリートでもなければ、日々美食を味わう生活でもなく、冷

暖房つきの家を持つている人たちでもなかった。当時のフジモリ大統領は、地下を掘り進む作戦を指示。結果部隊によつて、犯人たちは全員射殺された。中には命乞いをする者もいたが、生きることが許されなかった。私はなぜか犯人たちの子どもたちを想った。憎しみの連鎖とならないかと、あらたな報復の火種とならないかと。

世界はますます、富むものと貧しいものとの格差が広がっている。日本でも四人に一人の子どもは給食で栄養をとっているという。

今日、ある週刊誌を見て、シヨックを受けた。イスラム過激派が拘束した人質を射撃するのに年若い少年たちを使っているのだ。十二、十三歳の少年が、並んだ人質を射殺している写真だった。まだ幼い少年がなぜ、このようなテロ組織の戦闘兵となるのか。

日報の「イスラム国と日本円」の記事で印象に強く残つたものがあつた。「過激派の根底にあるのは敗北感だ。イスラム教の聖地にユダヤ人国家をイスラエルに建国された屈辱。『強いアラブ・・・』を目指し、自国の改革を目指した運動も、親欧米の独裁体制に徹底弾圧された。敗北に次ぐ敗北・・・略」。敗北感・・・おそらくあの

少年兵も長い内戦によって、両親を失い、家を失い、難民となり、銃を持つことになったのではないか。「意味のある人生に」「暴りたい」「金と権力がほしい」——現実世界に絶望した若者がアルカイダと関連組織に飛び込んだ動機といわれている。

また、十二、十三歳の少年に銃を持たせる世界とは何だろう。このことだけでも二十一世紀の世界は失敗かも知れない。第二次世界大戦からもまだ人類は何も学ぶことなく、どれほどの戦争を起こしてきたか。武器を作り、武器を使った国々は、どこなのか。支配、被支配をめぐる地上に絶えない戦争。その犠牲になっているのが、子どもたちだ。

「目を閉じて、じつと我慢。怒ったら、怒鳴ったら、終わり。それは祈りに近い。憎むは人の業にあらず、裁きは神の領域——そう教えてくれたのはアラブの兄弟たちだった。」

これは、二〇一〇年に、後藤建二さんがツイッターに書きこんだという七十八文字、今、多くの人たちに読まれているという。

弱い立場にいる人達・世界からかえり見られないとこ

ろで必死で今日を生きている人たち。そのなげきや悲しみ、その声や笑顔や日常を伝えた後藤さんの「憎むは人の業にあらず」——これは信念であり、哲学であり、宗教であり、なにより、人間世界がそうでなければという後藤さんの背骨であり姿勢だったのだろう。

日本はどう進んでゆけばいいのか。後藤さんのメッセージに答えはあると思う。

日本は、世界のどの国も、まねのできない七十年という平和の歴史がある。九条の旗がある。以前、ある記者が、戦争の絶えない国に取材したとき、「日本には憲法九条というのがあるんだよ。戦争をしないって決めてるんだよ」と子どもたちに話すと、子どもたちは目をきらきらさせて「いいなあ国が戦争をしないって決めてるなんて・・・」と話したと言う。忘れられない記事である。九条は武器よりも強い。その旗をかかげて七十年間、日本はどの国とも戦争をせず、一人の死者も出してないのだ。これはすごいことではないだろうか。押しつけ憲法でもかまわない。愚直に必死に戦争放棄の旗を日本の空にかかげてきたのだ。他国とはちがう方法で世界に

平和の尊さを示してきたのだ。この旗の美しさ、日本と日本人を守ってきたのはこの九条の旗なのだ。この七十年の歴史は、日本人を鍛えている。日本人は戦争を嫌う民族となつていると私は信じている。原発ではない。日本ブランドの憲法九条を世界に「輸出」するのだ。その為には「怒つてはだめ、怒鳴つたら終わり・・・」ねばり強く、ことあるごとに高く高くこの旗をふり、世界と手をつなぐ。政治家を選ばなければならない。

主権在民、憲法で守られている主権者である私たち一人一人が、歴史の中で、「今生きていること」を大切に、戦いのない世界を構築するため、常に、平和とは何かを問い続けることだと思う。

いのちをつなぐための人道支援を続けながら、それができる日本の素晴らしさの根底には九条があることを世界に示してゆくことだ。真の平和のリーダーシップをこそ示せ。

21  
今日の事件を憲法改正につなげようとする動きは、ほんとうに見苦しい。受け入れ国の了承がなくとも「救出に自衛隊が出動できるようにしたい」という発言・・・いったいどこまで勝手な解釈だろう。とても美しい国の

政治家と思えない。明確に戦争を否定している日本の憲法は世界に誇ることでできる素晴らしいものであり、論理のすり替えや、敵対感情をあおつてばかりいる首相には早く交代してほしいと思う。

平和のため、日本が貢献できることはたくさんあると思う。それは軍事力を使わない。和する心の発信である。世界から悲しい少年のテロリストを出さないためにも、私たち大人は、誇りをもち、平和憲法を守り、世界のために団結して九条の精神を広げよう。

父は私の結婚の前年に六十一歳で肺がんで死んだ。葬儀の後、ある方が、「あなたのお父さんね、広島、長崎の平和行進の時、いつもジュースを差し入れてくれたんだよ」と伝えてくれた。それは、私の心にいまも小さな灯火となつている。

# ヴォイナ (戦争)とくわい名前の女の子

田村和子

ポーランドの児童文学作家ヨアンナ・ルドニャンスカから「広島」を題材にした童話に取り掛かった、というメールが届いたのは昨年春のことでした。その後、日本の食べ物や習慣について質問するメールを何回か彼女から受け取ったのですが、そんなメールのひとつで、わたしは童話の主人公の名前がヴォイナだと知って言葉を失いました。ヴォイナとはポーランド語で「戦争」という意味なのですから。

親は何よりも将来の幸せを願って生まれた子どもに名前をつけます。健康であるように、聡明で賢い人間になるように、美しい心と体の持ち主になるように、勇気のある人になるように、思いやりを忘れない人間であるよ

うに等々……それが、主人公の名前を「戦争」にするとうのです。平気で人殺しをするような人間になれと思つてのことなのでしょう。童話の主人公とは言え、程があるではないかと、わたしは腹立たしくさえなりました。そして昨年秋、挿絵の入った完成原稿が添付メールで送られてきました。要旨は次のような内容です。

七つの川が流れる美しい街にヴォイナ（戦争）と言う名前の女の子がいた。父親は軍人で、娘にヴォイナと名づけたのはこの父親だった。女の子は軍服姿の父親が大好きで、大きくなるにつれて、父親の軍帽をかぶったり、軍刀を振り回したりして遊び、

時には父親に肩車をしてもらってパレードにまで出るようになった。

一方、母親は口には出さないものの、そんな夫と娘の振る舞いを心の中では快くは思っていないかった。その母親が男の子を産み、ヴォイナに弟ができた。母親はこの弟にかかりきりで、ヴォイナはますます母を疎ましく思うようになった。さらに自分は女の子であるがゆえに軍人にはなれないのに、弟は立派な軍人になれることが悔しくてたまらなかつた。

ある日、父親は勲章がいつぱいぶら下がった軍服を身に着け、大きな軍艦に乗って外国へと旅立った。戦争が始まったのだ。やがて食糧難となり、ヴォイナはいつも空腹に悩まされた。最初は母親に分らない程度に納戸にある干物や海藻、梅干しをつまみ食いしていたのだが、ある夜、半分眠った状態のまま、ヴォイナは納戸にしまつてある食料を全部平らげてしまった。

朝、保存食が全て無くなっていることに気がついた母親は激怒し、弟に何を食べさせたらいいのか、

と叫びながら外に逃げ出したヴォイナを追いかけた。その時、一機の飛行機が頭上に飛んで来た。

ヴォイナと母親が空を見上げた一瞬後、周囲に閃光が走つた。ヴォイナは井戸の陰に隠れ、手で頭をおつた。こんなにまぶしい光を目にしたのは初めてだった。気がついたら家はつぶれ、多くの人が倒れていた。母も変わり果てた姿で地面に転がっていた。家の中にいたはずの弟の姿もない。周囲にはうめき声、泣き声。皮膚が剥けて垂れ下がった人々がまるで亡霊のように歩いて行く。川にはたくさんの死体が流れていた。

ヴォイナは重い板に挟まれて身動きがとれなかつた。その時、もじやもじやの髪に黒い顔、緑色の目の大男が突然現れ、ヴォイナを助け出してくれた。男はヴォイナを抱え、炎をかわしながら駆け出し、病院の入り口にヴォイナを置くと、また突然に消えてしまった。ヴォイナは一命をとりとめた。

ようやく戦争が終わり、父親が帰ってきた。しかしその父親にかつての勇ましさはなかつた。体は小さくなり、まさに廃人のようだった。もう軍服を着

ることも行進をすることもなかった。

ヴォイナは名前を変えた。今度は「ポクイ」（平和）と言う名前に。

一年に一度、ポクイはかつて死体が流れていた川に灯籠に流す。灯籠は流れに乗り、遠く遠く海へ、そして世界へと流れていく。

わたしは戦争が終わる一年前に生まれました。だから戦時中の記憶はありません。けれども物心がついた時、夕餉での話題はまだ戦争に関係するものが多かったと思います。そんなある夜、食卓で母がつぶやくように言ったことを今でも覚えています。

「あそこの家のお父さんも、こつちの家のお父さんも戦争で死んでしまった。でも我が家では父さんも、おじさんも無事に戻ってきた。良かったねえ。戦争は嫌だ。お前には平和の時代に生きてほしいから「和子」と名づけたのだよ」

そういえば、わたしの世代には和子と言う名前が少なくありません。みんな平和を心より望んだからではないでしょうか。しかし戦争が始まる前、戦時中、ほとんど

の人は深く考える前に戦争に飲み込まれ、戦争を受け入れ、戦争に勝つことを信じていました。子どもたちは戦争ごっこをして遊び、兵隊さんに憧れました。それは言ってみれば、一人一人の子どもが「戦争」というもうひとつの名前を持つていたことに他なりません。

ポーランドの友人が書いた童話を読み返しながらそんな思いに到った時、わたしは腹立たしさを忘れ、むしろ感動を覚えていました。主人公に「戦争」と言う名前を与えた意味が理解できたのです。

今年、広島と長崎に原子爆弾が投下されてから七十年の節目にあたります。その年に「ポーランドでは「戦争」と言う名前の女の子の童話」が出版されます。

# 戦争、そしてテレビ

東野 正

25

これまで戦争の映画やテレビドラマを数多く観てきた。子供時代にはアメリカで制作された連続テレビドラマの「コンバット」を夢中になつてずっと観ていた。第二次大戦のヨーロッパ戦線で、ドイツ軍と最前線で戦い続けるアメリカ軍の戦闘を描いたドラマで、主人公のサンダース軍曹と彼の主な部下は激しい戦闘を繰り返しながらも最後まで死ぬことなく勝ち続ける番組であつた。

しかし、これが子供心に悪い影響を与えたのだと、最近思うようになってきた。それは、戦闘の画面を観ている自分、そして主人公は戦闘があつても最後まで生き残ることが分かっているからで、安全を保証された場所にいることができるからである。そして、それは、現代でテレビゲームを遊ぶ時に、画面上では自分が倒されても現実の自分には危害が及ばさない、何も起こらないという特権的な位置にいられるということと同じであり、ゲーム上では、平気に何人も倒し、殺し、破壊し尽くすことができる。さらには相手を皆殺しにできた快感すら覚えるようになってしまふのである。

そこから、現実の世界で「人を殺してみたかつた」という驚くべき動機に結びつくまでの距離は、そう遠くはないように思える。ゲームの画面の前の安全地帯にいて、ゲーム機を指で操作し、画面上の敵に対して殺戮と破壊を繰り返してゆく。それは、アメリカ軍の無人機の爆撃による殺戮とほぼ同じレベルに近づいてゆく。

現実世界で、特に中近東諸国では、アメリカ軍

の無人機攻撃や多国籍軍による空爆で、殺された人の生き残った家族が、アメリカへの、多国籍軍への報復のためにテロリストに志願することになるだろう。そのことを想像できないアメリカ人として多国籍軍は、他国を簡単に侵略し空爆し市民を何十万人と殺戮してきた。これこそ他民族、他宗教へのテロ行為以外の何物でもないと思えるのだが。

辞書で調べると、テロとは「あらゆる暴力的手段を行使し、またその脅威に訴えることによつて、政治的に対立するものを威嚇すること」とあり、一応、政治的目的があればテロであり、単なる暴力とは区別されている。しかし、テロの定義を再検討しなければならぬと思う。法に（国際法やそれぞれの国家の法・誤った法、狂っている法としか思えないのだが）従い殺戮をするのが戦争で、法を無視して行う殺戮がテロと、一応分類してみても本質的な中身は変わらない。戦争とテロは何が違うのか、どちらが正しく、どちらが誤っているのか？私には同じに見える。戦争もテロ

も。暴力行為はすべてテロと見なしてもいいと思う。学校でのいじめ、家庭内暴力、セクハラ、モラハラ、パワハラなんでもあるがすべて他人に危害を加えるものはテロ行為と見なせるのではない。もちろん言葉による暴力も含まれる。テロとの戦い？テロには屈しない？テロを防止する？

テロは決して正当化されるものではないが、暗殺とテロは長く歴史に刻まれてきている。ローマ帝国のシーザーの暗殺やら、日本の大化の改新の蘇我馬子の暗殺をはじめ、うんざりするほどの歴史がある。書店で立ち読みした「殺戮の世界史」という本では、世界の戦争や内乱・紛争で、何十万人、何百万人、何千万人レベルの人が殺戮されてきたことを記述していて、そのことに暗然とする。数字自体は推定レベルであるが、とんでもない数字の人が殺されてきているのである。なんとこの世界は、殺戮を繰り返してきた世界であることか。

話を戻すと、「コンバット」では当然味方も傷つ

き、あるいは戦死してゆくなかで、主人公側からみたら敵であるドイツ兵を倒す（殺す）と一話完結となる。この時、主人公達に撃ち殺されたドイツ兵のことを思いやる視点は全く欠けている。ドイツ国内の各地から徴兵され、あるいは志願して戦線に送り込まれたものの、無敵で不死身ではないかと思われるほどのサンダース軍曹らに撃ち殺されてしまう。そのドイツ兵一人一人は、あちこちの町や田舎出身の若者達であり、家族がいて、恋人が無事の生還を祈って毎日祈りを捧げられているのであるが、体を撃ち抜かれ、手榴弾で体を吹き飛ばされ、故郷に帰ることなく死んでゆく。一人一人に命があり、生活があり、感情があり思考があり夢や希望があったのに、アメリカ軍がそれをいとも簡単に吹っ飛ばす。

そして、テレビを観ている自分達は、アメリカ軍と同じ視線で、目に入るドイツ兵を倒すたびに喝采を上げたいような気分になり、「やった！」と快哉を上げるような少年期をうかうか過ごしてきたのだった。そのことを今、大いに反省してい

るのである。

実は、それは日本の時代劇にも当てはまるのである。私の祖母はチャンバラ映画が好きだったせいで、小さい頃はいつも映画館に連れて行ってもらい、沢山の時代劇の映画を観てきた。映画の最後のほうでよくあるパターンとしては、悪徳代官や悪徳家老、悪徳親分、悪徳商人の命令で、家来や手下達が主人公を取り囲む。そして「斬れ！斬れ！」の号令と共に主人公に斬りかかってゆくのだが、ほとんどの場合、主人公に切り倒されてゆく。この家来や手下一人一人に事情があり家庭があり、ささやかな夢や希望を持っているのに、野菜をスパスパ切るように、一人一人簡単に斬り倒されてゆく。重傷で済んで命が助かる場合もある。しかし大量出血で息絶えることの方が多いのではないか。

この殺されてゆく人への想像力・配慮を欠いたまま、一本の映画では命令に忠実だった家来や手下らが何十人も、命を突然絶たれて消えてゆく。その最後の日も、普段と変わらずに朝ご飯を食べ、

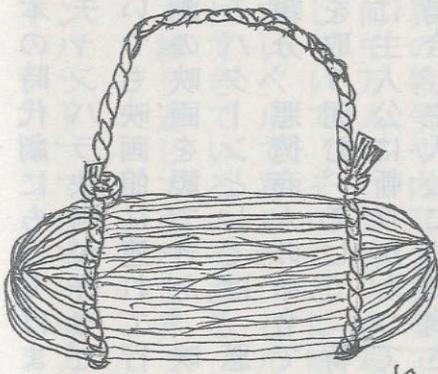
身支度をして元気に（？）奉行所、代官屋敷、親分の家に出勤したのである。いつもと同じ日常の一日。しかし突然、その人にとっては非業の死を遂げることになった。悲報を聞いて、嘆く家族、恋人、両親、子供達。

そして、それらの事情は、現代の戦争や紛争と同様に全く無視される。人の名ではなく、生活のありようでもなく、ただ「何名死亡」と数に代置されるだけである。勝ち残り生き残った者達が、生活を続けてゆくことができる。

芸能番組で、相方の頭を叩くコンビがいる。また、横暴で思い上がった司会者がゲストの頭を叩くシーンがある。どついたり、突き飛ばしたりする芸能人もいる。笑えるシーンなどでは決してなく、とうてい正視に耐えられるものではないのだ。しかしテレビをみている子供達には、この程度の暴力なら許されるという風な感覚が染みこんでしまう。それは日常的には現実の世界では出来ることではないことであり、彼らが我々の潜在意識を

代行して暴力的行為に走る姿に、密かに「そんなことができない自分に代わって、ようやってくれた！」と思うことにつながるであろう。

中国での文化大革命では「造反有理」というスロガンが大きく掲げられた。この言葉に触れた時は肯定して自分の行動を正当化した時もあったが、しかし暴力はいけない。自分防衛のため、他人に対する暴力行為を認めたくなくなるときもあることを否定はできないが、最低限の暴力も許さないような世界を綴った、「非暴力の世界史」を、人類は書き始めることはできないものであろうか。



魚ツトコ (わら)

## 満州の恩師との再会

金野 清人

戦時中、幼いころ暮らしていた満州（中国東北部）の想い出を、時々、詩や随筆などの題材にすることがある。これまで別の題材で新聞や雑誌に載つても、滅多に電話や手紙をもらうことはないが、満州を取り上げたものとなると思いがけない反響がある。

以前、岩手日報の随筆欄「ぼん茶せん茶」に拙文が掲載されたときのことである。

「小岩井に住んでいる小瀬川という者です。わたしはあなたの入学した牡丹江私立聖林在満国民学校（小学校）に勤めていました。聖林の文学が目に入り、心臓が飛び出すほどびつくりしました」と電話が掛かってきた。

まさか六十年以上も前に入学した母校の先生が、敗戦で在満邦人が数十万人も志望した戦の中を逃げ延びて、しかも隣の町に、それも八十七歳でご健在とは……。予想だにしなかった巡り合いに、一瞬、言葉を失ってしまった。

満州でご子息を亡くされ、命からがら引き揚げてこられた先生は、高ぶった口調で満州時代の想い出を堰を切ったように話された。

感無量の思いで承り、後日お伺いすることを約束し、興奮冷めやらぬまま立っていると、「盛岡の柳沢という者ですが、わたしも聖林の隣の学校に入りました」と電話で名乗られた。またもの奇遇に驚き、小瀬川先生の話をする、ぜひ一緒に訪問したいとのこと。

数日後、柳沢さんと小躍りしながら先生を訪ね、千載一遇の巡り会い、お互いの万感胸に迫り、時の経つのも忘れてかわるがわる語り合った。

拙文の中のスケートリンクは、先生がせつせと水を張って作ってくれたものと知り、無邪気に氷の上を駆け回っていた幼いころの光景が切なく脳裏に浮かんできまってきた。

話が一段落したとき、先生は一冊の本を取り出してき

た。それは数人の卒業生が、戦後、各地に離れ離れになつてしまつた同級生の消息を尋ね、長年かけて作成した名簿だつた。

恩師の欄から見っていくと、なんとそこに聖林在満国民学校一年生の担任、大谷シゲノ先生が載っているではないか……。

遠足の時、戦地の荒野に転がっている死骸を見て、震え上がつてしまつたわたしの体をしっかりと抱きしめてくれた先生である。

同窓会名簿を穴の開くほど見つめた後、再訪をお願いして帰路に就いた。

名簿が出来て十年以上も経っているので、大谷先生はご健在だろうか……。一抹の不安がよぎつたが、はやる胸を抑えながら福島県いわき市に住んでおられる大谷先生に電話を掛けた。

「先生に一年生の時、受け持っていたいだいた金野清人です」と名乗ると、先生は「あれっ！」と叫んで言葉が一瞬途切れたが、しばらくして「ほ、ほんとに、お久しぶり……。」と、うわづつた声で話しかけてきた。

八十七歳になられた先生は、やつとの思いで引き揚げてきたときの状況から、家族に囲まれて安楽に過ごして

おられる近況まで、涙ながらに、声を震わせて話してくださつた。

わたしも約六十年ぶりの巡り合いに胸がときめいて、言葉が続かなくなつてしまつた。

その後、気を鎮めてからお便りを差し上げると、早速、お返事が届いた。

「先日は、入学したばかりの可愛い金野さんからのお電話だつたのでびっくりしました。一年生の時の担任だつた私を、よく覚えていてくださつて本当に感激しました。有り難うございます」と認めてあつた。

満州時代の四年間、父の枕元にはいつも日本刀が置かれていた。死と隣り合わせだつた満州。異国の地であどけないわたしを育てくれた恩師との再会は、シベリアのツンドラの下で眠る父の引き合わせだつたのかもしれない。満州の恩師と、巡り合つて七年間、お便りを交換しながら、お互いの安否を気遣つておつたが、教えの庭にスケートリンクを作ってくれた先生も、遠足の時、死骸におびえている私を抱いてくれた先生も、九十四歳の時、波瀾万丈の生涯を閉じられた。

満州の恩愛の先生方、どうぞ安らかに眠りください。

# 義父の遺言

佐藤 弘子

義父の三回忌を目前に部屋のかたづけを始めた。義父のありし日の服を眺め、想い出にふけつたりして、なかなかたづけが進まない。気分転換をし、場所を変え、押入に手をかけたら、奥の方に、黒くて、大きな塊があった。

引つ張りだし、広げてみる。横五〇センチ位、長さ八〇センチ位の円筒の、小汚い袋が姿を現した。

表と思われる場所に、本人を証明する入籍日、氏名、所属、横須賀軍需部と記入されている名札が貼つてある。

その底には、大きな数字、六三の二、と記されてある。

中に入っている物が、気になりはじめた。

一つ目は、古びた紙袋に、写真が束ねてある。一枚一枚手に取つて見る。

どの写真も、軍服を着用しているものである。

十六歳から十九歳の青春時代、戦争一色であることが明らかである。

昭和15年、9月13日、中国重慶にて零戦が初戦。

昭和15年、12月9日、釜石製鉄所勤労奉仕移動隊第一団。

自分が置かれた立場、その時代、その時代に何があつたか書かれている。ということは、戦後に書きたしたものであるのが分かる。

紀元二千六百一年、昭和拾六年、三月十日弟満蒙開拓青少年義勇軍志願兵で出兵。

見送りに帰省する。

昭和17年、1月、東京東洋精機株式会社、材料部入

団、二重橋前、同期と記念撮影。

訓示―愚ふる、我身に、畏くし、徴用令命棒で、務め果さん。

訓示―良きをとり、悪しきを捨て、他の人にをとらぬ、徴用務め果さん。

昭和17年、6月2日、満蒙開拓青少年義勇軍入学

満蒙勃利訓練所配属、渡満する。

朝、夕義勇隊隊歌訓練。

昭和17年、8月7日、日本軍ニューブリテン島から

ラバウルへ、米側―ガダルカナル。

昭和19年、3月6日、満蒙義勇隊軍にて、銃剣道一

級合格スル。

昭和19年、4月26日、徴兵、徴兵。

昭和19年、9月1日、青年団第9班奉仕〇〇〇解散、

各師団へ。

〇月〇日、米空軍―日本本土。攻撃、宮城松島飛行

訓練場攻撃サレル。

昭和19年、10月19日、フィリピン、マバラカット、

20機しか残っていない零戦、33人の戦闘隊員、爆弾を積んで敵へ突入命令。

(後日知る、米グラマン飛行隊には、搭乗員の命を優先するよう指導していた。)

有利、グラマンV 不利、零戦。

どこの国でも採用されなかった、十死零生作戦は日本だけのもの。

昭和19年、10月21日、神風特別特攻隊の先駆となる10名が選ばれ出撃。

昭和19年、10月25日、これを機に増員されたのが、神風特別特攻隊。

昭和19年、10月29日、戦死した兵士を、軍神とあがめ賛える。

昭和19年、11月1日、満蒙から第一師団、老萬参千人が南方へ、同期、レイテ、フィリピンへ、最初の十日程で、老萬人戦死。

昭和19年、11月25日、北海道。

一度も戦場に出る事なく、敗戦を迎えた義父がどんな思いで残した写真だったのか。

残された写真には、一枚とて軍刀姿の義父が居ない。あつたかもしれない写真、処分してしまったのか、今

となつては知る事が出来ない。

昭和二十一年、実弟との写真がある。これを境に義父の顔が、戦争前の顔に比べ、一変しているのに驚く。頬は瘦け、カメラを見据える目はきつく、口もとは一文字、どこにも、ゆるみのない形相である。私の知っている義父の顔は、こうして六十年もの間保ち続けてきたのであろう。

二つ目の物は、ピンクの封筒で、表には、「贈」、裏には、伯父、と書かれていた。中身を開いてみると、大きな見出しが目につく。

「佐藤結人様」

変な袋で笑て下さい。でも伯父（祖々父）にしては、大事な宝です。

この袋は、旭が、昭和20年5月15日現役兵として入団した時、官給品としていただいたものです、私は海軍兵でした。

家には、充、亨、伴子、末喜代治が家を出て、私は最後でした。

33  
終戦の年でしたので、9月15日迫へました

（原文のまま）

読み終えると同時に、涙が止まらなくなった。

「汚いけどこれは捨てないで下さい。」

「大事な宝です。」

義父の思いが、この文の中で、全て語っていた。決して「封印したままにしておいて下さい。」というのではなかった。

義父の閉ざされてきた年月を考えると、語り継ぐ、という事がどれほど大事なことか、思い知らされた。

最後に手にしたもう一つの、紙の綴りは、平成二十二年、十一月、二十三年、一月と亡くなる、一年前に書き記したものであった。曾孫への手紙である。

「想い出の記、三代旭記」

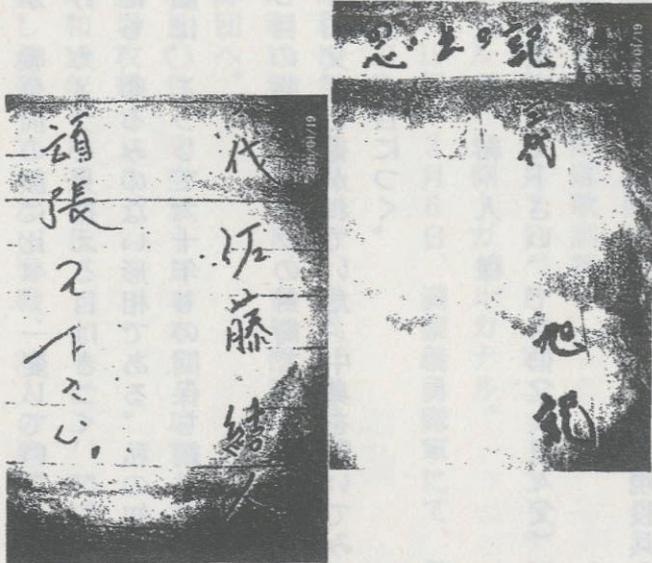
佐藤家、直系列になつてからの系図が、事細かく書かれている。

最後のページ一枚に、力強い時で、

「六代、佐藤結人へ。頑張つて下さい。」

戦後七十年経つてから、ようやく義父の声を聞くことが出来た。

その声は、次の時代を担う、曾孫に託された、心温まる手紙であり、平和を願って書き残してくれた、義父のやさしさであつた。



# 佐藤 結人様

へん万代へ笑ひさへも伯父にいつか事を望む  
 2年旭が昭和2年3月15日現役美軍入団して  
 21給品ヒハースタ走モノイサ和時海軍兵  
 2年東京件末に代が家去入和日最後  
 2015年12月9日追へす

2015/01/19

# 「放たれた鳩」

(三)

渡邊 満子

締め切りぎりぎりに願書を出し、受験勉強もしないで盛岡の短期大学に合格することが出来ました。

親に内緒で受験したので暫くの間は黙っていました。入学するか迷っていた時、私の背中を押してくれたのは姉でした。私より三つ年上の姉は女学校でも優等生でしたから伏見屋の幸ちゃんや佐忠の美喜ちゃん等友達が進学していた宮城女専（現東北大学）に受験したかったようですが、家庭の経済状況から代用教員になり、黒沢尻

小学校に勤めました。姉は自分ができなかつたことを私に託したのかも知れませんが、「学校に入っておいた方がいいよ」と常に言っていました。私の学費等は少ない給料からみんな姉が出してくれたのです。

大学へは二年間、汽車通学をしました。北上から一緒に通学していたのは五人です。駅前の高橋栄子さん、鍛冶町の平野雛ちゃん、齒科医院の中野彊ちゃん、小野寺敦子さんと私です。当時、私の家は花屋町にあり、黒沢尻の停車場まで歩いて十五分、北上から盛岡までは汽車で約二時間かかりました。更に盛岡駅から大学まで歩いて四十分でした。朝一番の始発、六時の汽車に乗るのは朝寝坊の私には大変辛いことでした。特に冬はまだ暗く、寒さも厳しく泣きたいようでした。私よりも早く起きて弁当を作ってくれていた母の姿が浮かんできます。

汽車に乗ると友達がいてほっとするのです。駅前の栄子ちゃんが一番遅くぎりぎりに駆けつけ、遠い鍛冶町から歩いてくる雛ちゃんが早く来て汽車に座り待っていました。私もおそく発車実際にすべりこむ方でした。朝ご飯を食べないで来るので、みんなは車で弁当をひるげ

て食べていました。花巻駅からは同じ大学に通う人達が六人乗ってくるので急に賑やかになったものです。

汽車通学をしたこの二年間には、網棚に乗せていたコッペパンが落ちて来て恥ずかしかった失敗談や車中で栄子ちゃんが声をかけられたパキスタンの外交官のお家を訪ね沢山のお土産をいただいたことなど懐かしい思い出が沢山あります。

戦後六年、食糧不足、物資の貧しい時代が続いていましたが、私は家が貧しかったので質素な服装で通学していました。

入学式には、叔父さんの着た黒い詰襟の学生服を改良して仕立てた上着、スカートは友達が貸してくれました。親切で世話好きの友達がいて一生懸命すすめるので彼女のプリーツスカートを履いて参列しました。この時の入学式の写真がセピア色の写真帳にあります。

新制大学でしたので大学と言っても校舎は白梅（現盛岡二高）の一部を借りて使用していました。現在は滝沢に近代的で立派な学舎が建っています。

昭和二十六年、四月、入学式。会場はどこだったか思

い出せません。新制大学の第一回生でした。入学式は家政科と美工科と一緒にした。家政科は殆んど高校卒の人達でしたが美工科には年上の人など年齢の違う色々な人がいました。というのは学制が変わり美術学校から編入して来た人達などもいたからだと思います。その中には深沢紅子さんの息子さんの門太さんや児玉晃さん（智江さんの義兄）等もいました。日詰駅からは一際背の高い菅原さんが乗って来ました。とても目立ったので印象に残っています。その他ユニークなタイプの人達がいました。専門の教科は別れていましたが一般科目の授業は一緒でホールで受講しました。哲学や心理学などは興味のある講義でした。

夏休みに美工科の人に声をかけられモデルになったことがあります。一人で行くのが不安でしたが思いきって大学まで行ったことを思い出しました。夢のようにしかおぼえていません。その時お札に頂いた額に入った油絵があるので本当だったんですね。

自分にとっては苦手な家政科に入り失敗することもありました。

調理実習の試験のときです。限られた時間内に料理を仕上げなければなりません。よつぽどあわてていたのでしよう。最後に味を見たら変な味がするのです。醤油の代わりにソースを間違えて入れてしまったのでした。気が付いたときは時間もなくなってしまうのできませんでした。あのときのことを今でも思い出すと鳥肌が立ちます。

一方、良かったことは、高校時代までやっていたバレーボールを大学でも続けることが出来たことです。

高校時代、黒北高のライバルで、県下でも一・二位を争っていた白梅の選手だった沢田さんと一緒にになりました。沢田さんは中衛のセンター（この頃は九人制）でした。どんな球でもレシーヴするので当時はにくらいと思つていたものです。一級下には高校で前衛のライトだった斉藤良ちゃんがいました。その他にもバレーをやつて来た人が数人いたのでチームを作ることが出来ました。校舎の中庭にある一面のコートで放課後バレーの練習をやっていました。岩手大学の男子学生が毎日二・三人来て私たち短大生を指導してくれました。その効果もあつ

て大学の東北大会で優勝したことがあります。

短大二年生のときです。バレーの指導に来ていた岩大の学生にさそわれて良ちゃんと一緒に十和田湖に行つたことは忘れられない懐かしい思い出です。十和田湖は初めてでした。あの神秘的な湖を見たときは吸いこまれて行くようでした。夜、月光をあびながらボートで湖水を巡つたことなど若い日のロマンチックな思い出のひとつです。

大学の近くに進駐軍の家族が住んでいる家がありました。通学の途中、その家から出て来る外国人の奥さんを見かけることができましたが、冬でも夏服のような薄いワンピースを着ていました。それに毛皮のふつくらとした暖たかそうなコートをぱつとはおつて颯爽と車で出かけていました。

又、あるとき、お家を見学に行つたことがあります。学校の課外授業のひとつだつたと思います。家の中に入るとクローゼットには何十着も洋服がかけてあり、下駄箱には靴が何十足も並んでいました。お部屋は暖房が効いていて、冬なのに夏服姿で生活している様子を見てほ

んとうに驚きました。台所はダイニングキッチンで椅子式の食卓テーブルでした。先生は「これが文化生活で「す」と説明していました。私の家では一番端にある暗い台所の板の間に飯台を置いて座って食べていましたから格段の差にただ驚く許りでした。

この時代、放出物資というものがありません。簡単に言えば進駐軍からの古着です。これを売っている店があつて安かつたので、私のこの放出物資から買ったコートを着て大学に通いました。八枚はぎでプリンセスラインのチョコレート色をした一見おしゃれで素敵なものでした。

駅前から発車すれすれに駆けつける栄子さんとは大の仲良しでした。いつも一緒にいるので「あんた達、双子みたいだよ」と言われました。彼女は大学に一番で入り頭も良く優しい人でした。お父さんは水産会社の社長だったので社宅に住んでいました。試験のときは水産会社の二階の大広間で二人で勉強したものです。お母さんがおやつを運んで来てくれました。「徹夜で勉強するべ」と言いながらお喋りをし、徹夜どころか二人共眠ってしま

い、翌朝、あわてて汽車の中で勉強する始末でした。

卒業後、私は県南の高校の教師になり、彼女は黒南高の定時制に勤めました。その頃、彼女から頂いた手紙には最後に「ツへ」、そして「ルより」と書かれています。高校時代私は旧姓が辻村だったので、「ツンチ」とか、「ツンちゃん」と呼ばれていました。彼女は「ダル」とかもつとちぢめて「ル」と呼んでいました。太つていたので仇名が「ダルマ」だったからでしょうか。六十年以上前に彼女から頂いた沢山の懐かしい手紙を時折取り出して眺めています。結婚して尼ヶ崎に行きましたが、余り幸せではなかつたようです。旦那さんが体調をくずし北上に戻ってきて旦那さんを養いながら眼科で働いていました。その後旦那さんが亡くなり、彼女も職場をやめてこれから楽しく自分のために生きようと思つていた矢先、急にガンを発症し七十歳で逝きました。

脳出血になり左手で書いたような同級生の小野寺さんから届いた年賀状と、栄子ちゃんは綺麗なものが好きだったと思ひ美しい季節の和菓子を持つてお見舞いに病院に行きました。娘さんの里香ちゃんが付き添つていて、

栄子ちゃんにハガキとお菓子を寄せようとしたら里香ちゃんに「眼が見えないんです」と言われ、はつとしました。「耳は聴こえます」と言われたので一生懸命に声をかけると頷いてくれました。そして「ツンチ、ありがとう」何回もくり返し言いました。「また、来るからね」と握手し別れて来たのですが、翌日、亡くなったことを知らされました。

松島で開かれた短大の同級会にも一緒に参加しました。その時オルゴール館に寄っていつばい並んでいるオルゴールの中から選んで二人で同じものを買ってきました。帽子をかぶり、ひょうきんな顔をした西洋の紳士が本を手持って読書をしているものです。彼女との思い出は尽きることがありません。

今、オルゴールのメロデーを聴きながら学生時代を懐かしみ彼女を偲んでいます。

(二〇一五・一・三〇)

## 千三忌と

## 保温シートから

八重樫 励子

「千三忌」いつも心に掛かっていましたが、稲刈りも終わり、秋の花々がゆらぐ、和賀の道をたどって、千三のお墓にお参りすることができた。

三十回も継続されている麗子さんやお仲間に敬意と驚きの念を抱いての参加でした。

お墓の前に立ち、一人息子を思う母セキさんの気持ちに改めて胸に迫ってくる思いがした。

当日は京都より専修寺住職の岸野様、金沢大学の先生、『花巻が燃えた日』の作者、加藤様も参加されて、夫々



の思いの深さを感じることができました。

\*セキさんの願ひ深まる千三忌三十回に両の手合わす

\*夫々の胸に鎮むる戦争の悲しみ永遠とわに消ゆることなし

\*生きてゐる者のまことの心とて線香、供花や料理をささぐ

\*収穫を終へたる里の千三の墓にしぐるる秋の雨やさし

\*千三忌持ち寄りきたるとりどりの料理に継なく想ひの

あまた

一 昨年の冬、思いがけず、静岡に住む、はこの弘より浴槽を保温するシートが送られてきた。寒い北国で家族の多い（当時九人のわが家）では風呂もさめ易いだろうとの心遣いらしかった。

この弘は、昭和二十年八月十日、疎開先の花巻が燃えた日に、八歳であつたが、母（三十三歳）、兄（十一歳）、妹（五歳）を爆弾を受けて失い、父は足をもがれ、その父もしばらくして逝き、彼は戦争孤児となつた。

私の家で小・中と育ち、弟のように思っていたが、高

校を自分で中退して、静岡に働きに出た。以後、紆余曲折であつたが、その彼の息子から、昨年、喪中のハガキが届き、驚いてしまった。

その時、改めて、彼の一生や、花巻の空襲で逝つてしまった若き一家の事を考えさせられた。戦争に追われて、東京から疎開してきて、たつた一カ月で爆死。何のため生まれ生きてきたのか！。その一家の記録を残して下さつた加藤様に、弘の死をお伝えしたかつた。千三忌でお目にかかり、そのことを伝えたら「彼も逝きましたか」と目を伏せてしまわれました。

時が流れ、戦後も七十年、戦争のむごさ、悲痛さを体験した人が少なくなつた今、忘れてはならない事を訴え続け、千三忌を続けられている小原さんたちに敬意と感動を覚えます。

自分も何か少しでも平和のために行動しなければ、と感じた一日でした。

彼より贈られた保温シートは、寒くなつても、彼の思いを消さぬ様に願つて、今も使うことなく大切に保存しております。

いろいろありますがありがとうございました。



## 桐のタンスの中から

### 兒玉智江

(北上市相去町)

○正月早々、義母専用だった桐のタンスの小引き出しを整理する。当時の戦争風景写真や書簡が引出に詰まっていた。

夫の兄兒玉茂・兒玉巖は戦死して七〇年以上経つ。戦死した兄たちの郵便物を義母は時々引き出しから出して見入っていたのを知っている。

その中に、昭和五四年『相去村・皇國殉土集會所』。昭和六一年『英靈にこたえる会たより』・昭和六三年『岩手遺族通信』の新聞が赤茶に変色して入っていた。今年には戦後七〇年になる。戦争に関わって来た人たちにとっては、それぞれの感慨深いものが蘇る。

○浅水末男さんが自宅の離れに建てた『相去村・皇國殉土集會所』が開館した当時、義母と一緒に訪問した事がある。義兄・茂と巖の顔写真に点灯して拝んだのは約三〇年前になる。浅水末男さんがお亡くなり、閉館したと聞いていたので、どうしているのかと思ひ二〇一五年(平成二七年)二月一日訪ねてみた。

浅水達(いたる)さん(末男さんの長男)の奥様和子さんが応対してくれた。

「展示していたすべての資料などは、3年前北上市立図書館へ運んでくれました。50箱あったそうです。『皇國殉土集會所』は2013年3・11の地震で壊れ心配でしたが、資料の行き場所が決まり安心していきます」と話された。

故・浅水末男氏は相去の助役・村長をしていた。日本政府の軍人要請に賛同しなければならず、沢山の若者を戦争へ送らなければならなかった。戦死した若者が多く、悔やんでも悔やんでも足りない。『相去村・皇國殉土集會所』を作り、相去村各故人の戦死者の命日に毎日のように手を合わせるのが日課とし、せめてもの罪滅ぼしにしたい、と毎年のお盆の遺霊祭の日に、ご挨拶の中で話されていた。

『相去村・皇國殉土集會所』を開館した時のパンフレットの「ご挨拶をそのまま綴ることにする。」

「戦殉者等の七生報告を願って」

私達は、戦争によって私達の大切な幾人もの肉親と友人、多くの村人を失った。

私は、昭和一二年二月から相去村助役として十九年

余、村長四代に亘る戦時行政に全力を注ぎました。そして、戦後占領軍指令による政令で\*追放された。

日支事変勃発するや、村から、八月三日海軍の高橋絢夫内曹長を真つ先に、同二二日佐々木榮兵曹・石母田和司水兵、又、同二五日は陸軍の及川伝右エ門勅工兵少尉に続いて二六日三宅省三工兵、二七日小原光輝幅重兵と吉田福蔵海軍飛行兵、更に三一日小野伊左エ門等歩兵一二名に招集があり、元來終戦までの八か年余りに亘る戦争へ応召人営者延べ六七一名、内現地入隊者二〇数名を除く総ての壮行を、一人一人激励歓送して、具管、武軍長久を祈っていた後輩もなく、遂に、還らない一四五名の方々を偲ぶ時至上とは申せ、罪のようなものを意識しない訳にはまいりません。

未だに公式参拝も許さない、あの深刺有能な、老いる事のない靖国の殉土を、只、ご冥福をと風化させるに忍びないので、日清日露の戦没者及び非業に惑わされた方々をも加え楠精神の「七世報告」の甦りを願い、戦時資料も展示して、当時を再現しました。そして、この施設が遠くなりつつある現代と平和が、あの悲惨な時代の延長である事と皇國に住み、混迷不安の時代

を生き抜く術とを、戦争を知らない世代にも感じとらせることが出来るものと『皇國殉土集會所』と名づけて、一般の見学用に開所しました。

尚、相去村は昭和二九年十月一日北上市と金ヶ崎町に分断されたが、この集会所が両地域の旧交友を温める場として、「温故知新」の役ともならば、望外の幸いである。

昭和五四年七月七日 浅水末男

○\*追放された。ことについて、どういふことかを浅水遠さんからお聞きした。当時、村長として、政府に逆らうことなく、多くの軍人を送り出した。それで、その罪で村長や助役など、その他の役職にはつかれないと言う命令がでたと言う。職業が自由になり、解除になったのは、二五年後だったという。

昭和六一年の『岩手遺族新聞』より

略。

43 諸般の事情があるとはいえ、我が国の為に尊い一命を捧げた戦没者を追悼し、英霊に感謝するとともに平和を祈念する事は我々国民の儀礼であり、靖国神社がその追悼祈念

の中心的施設であることは、政府が自ら明らかにしたところである。一部でいわれる如き、かつての大戦を賛美し、軍国主義の復活を助長する意図のない事は戦没者遺族を始め国民も熟知しており、もとより政府にその考えのない事は当然である。

また、いわゆる中国の戦犯合祈批判についても東京裁判の国際法上の質疑もあるが、それ以前に靖国神社も国民も戦没と呼ばれる方々を特別顕彰するものでなく、一軍人として、一公人としての立場で国に殉じた者として合祈しているのである。現在の中国と政治風土社会的制度、習俗も異なり、両国の国民の感情は所詮一致をみる事は出来ないと思われる点もあるのである。昭和六一年六月一日財団法人・日本遺族会代表者の寄稿である。

○この記事は、中曽根内閣が昭和六〇年の八月一五日靖国神社に公式参拝を実行した時、内閣への公式参拝に対して日本遺族会として敬意を表し感謝した時の新聞記事である。

公式参拝をしたと言う事で、中国への怒りをあおるから止めるのが当たり前と言つて目くじらを立てる人も多くいる。しかし、この当時は日本軍国として国の為に命を捧

# 「台湾の旅」

## —— 原住民族と霧社事件 ——

宮崎 順子

私は、今迄台湾にほとんど関心を持たなかつたが、夫の冬休みを利用して旅の計画を立てた。寒い冬には南に行こうと思う。昨年の冬休みはまず香港に入り、中国最南端の海南島に行った。香港では知人宅で世話になった。今年は私にとつては南国の未知の地に、ということになり台湾に決めた。荷物は小ぶりのキャリーバッグ一つにまとめ、身軽にして東京を出発した。

二人で二週間かけ、羽田——台北の往復航空券のみ予約し、移動の交通機関、宿、食事はその時々々のアドリブで台湾を一周することにした。台北から西海岸南下し、東海岸を北上して一周する旅が始まる。多分二度と来ることは難しいことを胸にして。

単なる観光旅行ではない何かを感じとつて帰りたいと思つた。

夫は台湾は二度目だが霧社事件のあつた霧社に行つてなかつたので、行きたいと言う。行くからには私も急いで勉強しなくては意味がないと、移動のバスやホテルでガイドブックに目を通した。

「地球の歩き方 台湾（二〇一四—一五）」によると、台湾の歴史は清朝、日本、中国国民党等の外地の民による統治だつた。

### ◎台湾原住民と霧社事件

一、五支族一四族に分類される少数民族の原住民族は六千年前にフィリピン群島から海流に乗つて島に到着したのではないかといわれている。

### 二、原住民族の呼称

平捕族・・平野部に住んでいた部族だつたが、漢民族が移住してきて平捕族の女性と結婚し家族をもち、風俗や習慣は漢民族文化に飲み込まれてしまつた。

山地民俗・・交通の不便な山地に住んでいたため、現在まで言葉や独特の風俗文化が今も残されて

いる。

これらの少数民族は、社会的にも経済的にも弱者で、女は身を売り、男は下級船員としてこき使われた。現在には原住民の権利獲得運動でかなり改善された。たと聞かぬが、地下鉄工事や建築現場などで働いている者が多いという。

### 三、日本統治と原住民

一八九五〜一九四五年迄（五十年間）日本帝国主義は台湾を日本の農産物供給地の植民地として統治した。この間に水沢町出身の後藤新平らがインフラの整備を急速に進め、現在の台湾の発展はそれが土台になっているという。

台湾で生きてきた大多数の日本人は誠実に生きてきたことが伝えられているが、日本帝国主義の植民地政策であったことには変わりない。

文字を持たなかった山地に住む原住民の土地の隅々まで多くの学校（交番を兼ねる）が作られ、また交通インフラの建設に寄与した。しかし一方で、日本は厳しい植民地政策をとり、抵抗運動は武力と極刑によって弾圧していった。これに対して少数原住民（モーナルダオ）が自発的に組織したゲリラによって激し

く抵抗したのが霧社事件である。皮肉にも文字を教育したことにより、民族意識が高まったのではないかとも言われている。

### 四、霧社事件とは

一九三〇年十月二十七日に台中市能高郡霧社（現在の南投県時仁愛郷）で起こった台湾原住民による日本統治時代後期における、最大規模の抗日暴動事件だった。

霧社セデック族マヘボ社（村落共同体）の頭目、モーナルダオを中心とした、六つの社の男たち三百人ほどが、まず霧社各地の駐在所を襲ったあとに、霧社公学校で行われていた小学校、蕃童教育所の連合運動会を襲撃。男たちは銃を乱射し、「番刀」ふるって日本人をめつた斬りにし始めた。日本の子どもたちの首は、母の名を呼ぼうと赤い口を開いたまま、胴を離れて地面に転がった。この時約四十人が殺害された。

この現場に居合わせた現住民族オピントダオ、日本名初子（一九九六年八十二歳で死亡）さんは、一部始終を目撃した。その後彼女は廬山温泉を開き、民宿を経営、霧社事件の語り部となる。

部落の現地の警察には霧社セデック族の警察官が二

名いたが、彼らは事件後それぞれ自殺した。

その後の日本帝国の威信をかけた日本軍の大弾圧により、蜂起した六社の約一千人が死亡し、生存者五百五十人は投降した。この顛末は「台湾・霧社に生きる」(柳本通彦著)に詳しく書かれている。

◎いよいよ台湾と霧社の旅へ

・一日目(12月23日)飛行機で羽田から台湾の台北松山飛行場へ

台北市内の若者たちの泊まる安ホテルに泊まる。夕食は町の食堂で済ます。

・二日目(12月24日)MRT(都市交通)で北投温泉へ

日本統治時代から有名な温泉地。現住民族ケダカラン族博物館、温泉博物館参観。地熱谷は九〇度、三つの源泉が湧く。ここから主に台湾各地の少数民族集落を訪ね歩く。

・三日目(12月25日)MRTで淡水へ

一六二九年スペイン人がサン・ドミンゴ城として建てた「紅毛城」参観。漁民埠頭で夕食。美味しい点心を食べる。

・四日目(12月26日)MRTとバスで烏来温泉へ

川原をスコップで掘ると温泉が出る。数人が入浴していた。

・五日目(12月27日)台北市内に戻り芝山に泊まる。

トロッコでタイヤル族の小さな食堂で朝食。トロッコ資料館見学。タイヤル族民族博物館参観。台北に戻り故宮博物院見学。展示物は充実していたが参観者があふれていてゆっくり見ることができなかった。この宝物の大半は蒋介石(国民党)が大陸から共産党に追われた時に運んできた物。

・六日目(12月28日)台中へ新幹線で移動。

台湾国立美術館に(現代美術展開催中。マリローランの特別展も参観)。台中の駅前ホテルに泊まる。

・七日目(12月29日)霧社へ蘆山温泉へ

台中からバスを乗り継ぎ霧社へ。霧社の食堂で荷物を預かってもらい、霧社事件の起きた公学校跡に徒歩で行くと、今はのどかな山間の平地だった。事件当日の朝、青空のもとで日本人四十人の生首が血しぶきと共に飛んだ。そう想うと目眩がした。ここを襲撃した頭目がモーナルダオだった。

近くにあるモーナルダオ抗日英雄の墓(三メートル

の墓石」と、「霧社山胞抗日起義記念碑」を参拝する。

崖道続きのバス路を蘆山温泉に向かう。見るからに顔つきが原住民らしい学校帰りの十歳ぐらいの女の子と乗り合わせた。自分のおばあちゃんが経営する民宿に泊まるように誘われる。バス停で女の子と一緒に降りようと腰を上げると乗り合わせた傍らのおばあさんたち四人が、だめ！だめ！というので降りるのを止めた。私たち彼女の家に行かなかった事をとて後悔した。なぜ周りの大人たちが私たちを制止したのか未だに不明だか、蘆山温泉に宿泊する。

・八日目（12月30日）バスで浦里に

バスターミナルの立ち飲みコーヒーで、反原発の活動の幕を見つけ感激。私たち夫婦は日本で反原発の運動をしているので、親近感がわき声をかけたら福島県出身の男性で、私は久しぶりに日本語で話す。旅行中の台湾人との会話は中国語を話す夫だけだったので、美味しいコーヒーだった。

・九日目（12月31日）高雄から少数民族のパイワン族、ルカイ族の住む三地門へ

台湾原住民族歌舞会館で十一族（現在は十四族）の

歌舞を楽しむ。四十分歩き安ホテルに宿を取り、近所の食堂で夕食。ホテルに帰り、買ってきた卵、パン、ウイスキーで年越し、外で爆竹が弾ける音が聞こえ、しみじみとした年越しだった。

・十日目（二〇一五年1月31日）三地門原住民族文化園から恒春へ

民族衣装の若者に混じり私も踊る。小さな食堂で昼食。たまたまテーブルで同席した台湾人の林さんに自分の車で、台湾南端の恒春ビーチに案内すると誘われ、車に同乗する。海岸に行き、果てしない海の落日を見る人たちの影が、海のバックに映えて旅情に誘われ、暗くなるまで海辺にいた。

自分と自然。水平線のかなたに船が浮かぶ。台湾の北から西海岸を南下し最南端に来たことになる。林さんの車で案内され、今夜は少し高級な「六福ホテル」に泊まることにした。

・十一日目（1月2日）花蓮へ

台湾南端から列車で東海岸を北上し、瑞穂に行き温泉宿に泊まる予定だったが、正月でホテルは満杯で、列車で更に北上し花蓮まで行く。タクシー運転手の案

内で安ホテルに泊まる。夜「阿美文化村」でアミノ族のショーを楽しむ。

・十二日目（1月3日）花蓮市内の日本人の経営する馨憶精致民宿に移る。

花蓮駅前で、レンタカーを借り、大魯閣（タロコ）

溪谷に行く。台湾を代表する景勝地で溪谷一帯の山岳地帯が、国家公园に指定されている。険しい断崖は、太古に珊瑚礁の海底が隆起してできたもので、その石質は大理石。大理石を浸食してできた川と、人の手が造り上げた路が断崖絶壁の間を縫うように走っていた。

・十三日目（1月4日）花蓮から基隆へ

花蓮から列車で基隆に行く。コダックホテルに荷を置く。台湾の西海岸を南下し東海岸を北上し、一周したことになる。基隆は高雄と並び、台湾を代表する港町、リアス式海岸で日本統治期には日本との窓口で、鉄道連絡船も発達し、石炭の積み出し港として栄えた。第二次世界大戦敗戦後、植民地を放棄した日本人の引き揚げ船が出たのもこの港である。

・十四日目（1月5日）基隆からバスでレトロな風情の小さな町の九フン（人偏に分）に

山を背にして、小島や海が見渡せる。交通が不便で狭い町の土産物屋に若い娘たちが群がっていた。私たちも若者よ！と海を眺めながらデザートのアレンジ（サトイモ、サツマイモ、山芋の団子、あずき、緑豆）を食べた。

・十五日目（1月6日）台北松山空港から羽田空港へ帰国。

終わりに

異国なのだが、どこか懐かしい感じのする台湾。

かつて日本の植民地でありながら、日本に愛着と憧れを持ち続けている人が多いこの地を訪ねて、人々のあたたかい気持ちにふれることができた。

グルメ目的ではないが、屋台などで美味しい食べ物に出会った。店頭の生の魚をえらび、その場で料理して貰うことは、毎回わくわくしてしまう。トロピカルフルーツを食べながら街中を歩いた、

台湾は自然とハイテク産業が同居していた。漢民族と先住民の織りなす台湾文化に触れ、心からの癒やしとエネルギーをもらった。

完





# 平和への

# バトン

山本 栄子

二〇一四年（平成二十六年）八月。私は高橋セキさんのお墓参りのため、岩手県北上市和賀町を初めて訪れました。

お墓を見守っておられます小原麗子さんの案内で、約五十年振り夢の実現です。

付近は、当時とはすっかり様変わりだそうです。セキさんのお墓はこれまで三回移動したとのことでした。現在は、広い舗装道路に面した林の一角、高橋家一族の墓

地の中にありました。五十年程前の新聞では大きく見えました。周囲に大きな墓石もありこじんまりとしたやさしい感じのお墓でした。

まわりの緑色の田んぼは、ちょうど稲穂が咲き始めたころのようです。稲の株辺りには、きれいなうす緑色の浮き草が沢山見えます。また田んぼ脇の水路の水も勢いよく流れています。農家育ちの私には、懐かしい風景でした。

近くには、四十数年前に統合で開校した和賀東中学校の広大な敷地もあり、校庭の片隅には、国指定史跡の長沼古墳の小山がいくつもあります。大昔から人々が暮らしていた場所でしょう。

お墓参りのあと、近くの小原さん宅でおもてなしを受けながら、お話をうかがい、幸せな有り難い旅となりました。

今回、夢の実現の発端になりましたのは、私が高校生頃、今から五十年近く前のことです。当時の朝日新聞記事に「平和のあしもと」の見出しで、老女が道端に建

てたお墓を拝んでいる写真と、その経緯が書かれています。

記事には、母一人子一人の暮らしの中で息子を戦争に取られ、戦死。母は自分が死んだら、戦争で死んだ息子の千三のことも忘れられてしまう。忘れてほしくないから道端にお墓を建て、墓石には「南無阿弥陀仏」とする。そうすれば、道行く人が墓石を見て「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えてくれるだろう・・・との一念で、貧しい暮らしの中からお金を貯めて、建立したとありました。

記事を読んだ私は十六、七歳の多感な年頃で、これからどう生きて行ったら良いか、生きることの不確かに思っていました。なぜ、高橋セキさんは、どんなに苦しい中でも生きようと思えるのだろうかと自問自答し、彼女の困難な中であつても力強く生きる姿勢に、引きつけられていました。

51  
それと戦後生まれの私は、おばあさん子で育ちました。祖母の二人の息子は戦死していました。祖母の懐で育った私は、子どもを亡くした母の悲しみを肌で感じながら大きくなっていました。祖母の悲しみと高橋セキさんの深い悲しみが同じにも思えました。

私はその記事を切り抜いて、生徒手帳の中に入れて持ち歩いていました。

時は流れて、その記事から二十年後の朝日新聞夕刊で、偶然高橋セキさんのその後に繋がる記事を目にしました。それによりますと、たまたまお墓の近くに移り住んだ詩人の小原麗子さんが、高橋セキさんの意志を引き継ぎ、一九八五年より書会のメンバーと共に、反戦・平和を求め『千三忌』として年一回の集まりをもたれていました。

この頃の記事の私は、福岡県久留米市で結婚後上京し、千葉市で家族五人（山本の母親、私達夫婦、中学生の長女、小学生の長男）で暮らしていました。独身時代の記事から繋がった嬉しさに、家族にも話し、記名のあつた記者・藝下彰治郎氏に経緯とお礼の手紙を書きました。すると藝下氏から速達で「早速山本さんの手紙のコピーを小原さんへも送りました」との便りを受け取りました。その後、小原さんからお手紙をいただき心打たれていた当時中学三年生の長女にもよろしく、との言葉が添えられていました。

その後も、薮下氏や小原さんとの年賀状のやり取りが続いています。小原さんからは毎年千三忌の記念誌『別冊・おなご』等をいただいています。ただ残念ながら、薮下彰治郎氏は今から一五年程前の一九九九年に、六十三歳で他界されました。その後は、奥様との年賀状の交流が続いています。

尤も生前の薮下氏とも年賀状や電話でお話するだけでした。薮下氏からは、私の窮状や連帯保証人の件、離婚等案じて、電話で「貧乏は恥ではない。時の運だ」とも励ましていただきました。有り難い思い出です。そのころの薮下氏は、糖尿病のため両足切断の手術や、リハビリでご自身も大変であったことをあとで知りました。

たまたま今年、平和記事関連で、「憲法九条にノーベル賞を」の切り抜きを友人から見せてもらいました。私も賛同し、他の人にも広めたいと考えて、お世話になっていました知人にもお勧めしました。その彼女と意見の交換をするうちに、私の中に『反戦』『平和』の意識が蘇り、一度高橋セキさんのお墓を是非ともお参りし、小原麗子さんにもお逢いしたいと強く思うようになりました。

今年は私も、実母の亡くなった年齢六十六歳になりました。疲れやすくなったり、誕生日には発熱したりと、一気に高齢者の仲間入りを実感しています。北上市へ行くなら元気の今のうちかなと思うようにもなりました。それに今年は、we(ウイ)フォーラムが福島県郡山市で開催されます。少し足を伸ばせば、連続して二カ所に行くことが出来るのかなと算段し、長年の夢を一気に実現することにしました。その一つが、冒頭の高橋セキさんのお墓参りです。

話は変わりますが、安倍政権になり、「特定秘密保護法」、「集団的自衛権」等いろいろなことが決まりつつあります。同時に私は、平和の危うさを感じています。かつて薮下氏は「軍靴の音がする」と危惧していました。戦後生まれの私にはその気配を感じる事が出来ませんでした。今は危惧します。祖母の悲しみや、高橋セキさんの苦しみ悲しみに、戦争反対の立場を強く思います。

「戦争を仕掛けられたら受けて立つ」との意見を持ち、戦争回避や抑止力の為いろいろな制度を整えるのに、

賛同の方の声も耳にします。多分、これまでの経験や体験で、立つ位置が違うだけで、その方々も「平和」を希求し「戦争反対」であると信じています。

今回高橋セキさんのお墓参りをするにあたって、薙下氏の奥様に電話をしました。・・・北上市へは薙下氏も生前、幾度も足を運んでいます。両足切断後も、一緒にと声をかけていただきましたが、そのころの私は経済的にも時間的にも余裕がありませんでした。・・・今回行くことも喜んでくださり、その時の会話で「レーン・宮沢事件」の秋間美江子さん（八十七歳）のお名前をお聞きしました。電話のあと、その事件と故人の薙下氏とのつながりがのみ込めなくて、インターネットで検索してみました。

「レーン・宮沢事件」とは、一九四一年に発生した軍機保護法違反罪の、冤罪事件とのことでした。北海道帝国大学工学部二年の学生だった宮澤弘幸さんと、英語担当外国人教師のハロルド・レーン、ポーリン・レーン夫妻（米国人）が、スパイとして軍機保護法違反で一九四一年一二月八日、特高警察に検挙されました。秋間美江子さんの兄の宮澤弘幸さんは、投獄されて拷問を受

け、獄中生活で健康を損ない、戦後釈放されたが結核がもとで、一九四七年二月二二日、二十七歳で東京にて病死。

このスパイ冤罪事件を掘り起こした上田誠吉弁護士や、いち早く報道にあたったのが朝日新聞記者の薙下彰治郎氏（故人）だったとのことでした。

昨年十二月の「特定秘密保護法」成立に心を痛めた秋間美江子さんは、自分のような冤罪のスパイの家族を決して作ってはならないとして、アメリカのコロラド州から病身をおして二月に来日したとあります。東京新宿の菩提寺「常園寺」にて弘幸さんの命日の二月二二日に、「宮澤弘幸追悼・顕彰二・二二のつどい」に参加し、講演しています。インターネットの動画によると、講演の中で江美子さんは、「私の兄・弘幸は親不孝だった。親に先立ち、しかもすごい死だった。本当に罪が無いのに殺され、親も私もスパイの家族として苦しんだ。こんな人間をもう作ってはいけない。そんな時代にはいけない。私はがんを患っているが、がんより怖いのが、国の政治“皆さん頑張ってください”と発言しています。そのあとの記者会見の質問のなかで、お兄さんのことを

尋ねられて、「兄は何も悪いことをしていないのに、どうしてそんなに苦しめられたのか、もう思い出したくない。ごめんなさい」と言葉に詰まっていました。

六十七年たつても、美江子さんの悲しき、辛さは消えていないことに私の心も痛みます。やはり『平和』になること、自由にものがいえる世の中であることのバトンをつなげていかななくてはならないと強く思いました。

岩手県北上市の高橋セキさんのお墓参りを無事にすませ帰宅した私は藪下さんの奥様に、お礼の報告のお電話をかけました。その際、秋間美江子さんの兄「レーン・宮澤事件」のことや、故人の藪下氏のジャーナリストとしての姿勢等もお聞き出来ました。今回、秋間美江子さんからお兄さんのことを聞きたくて、藪下さんのことを聞きたくて奥様へ電話がかかってきたとのことでした。そして、次回日本に帰国したら、是非お会いしましょうと、約束されたそうです。

今日でも政治的な話等、気軽に話題には出来にくいですが、少しでも話をする事で、世代を超えて平和を大切さを、共有出来るかもしれません。

これから生まれてくる未来の人も含めて、私の祖母や高橋セキさん・千三さん、宮澤弘幸さん、秋間美江子さんのような戦争の犠牲を経験すること無く、平和な世の中を継続していきたいと強く願っています。

私は今回も故人藪下氏から、しっかりと平和を繋ぐバトンを受け取ったようです。

△雑想館・28号より▽



雷踏沓(わらわ)

# 鶴彬と井上剣花坊

川柳人社主宰 佐藤岳俊

鶴彬

高粱の實りへ戦車と靴の鉾

屍のゐないニュース映書（映画）で勇ましい

出征の門標があつてがらんどうの小店

萬歳とあげて行つた手を大陸において来た

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動き知るころ骨がつき

た。本命喜多きた一二、父、喜多松太郎、母、寿すず々の二男であり長兄喜多孝雄、弟喜多一二三、妹、喜多政子、文子があつた。

大正十三年、十五歳の鶴彬（当時は喜多一児）が石川県いしかわの北国柳壇に掲載された三句がある。

（高松）喜多一児

静かな夜口笛の消え去る淋ししみさ

燐火まっの棒の燃焼にも似た生命いのち

雛ひなに宿る淋しい影よ母よ

55 川柳作家で詩人の鶴彬は明治四十二年（一九〇九年）一月一日、石川県河北郡高松町（現かほく市）に生まれ

十五歳の少年鶴彬の感性が詩心へ向かつて直に吐かれている。鶴彬は一歳で伯父の喜多喜太郎の養子となり、八歳の時父が死亡、母は再婚して上京した。伯父の家は小企業の機屋であり、多くの女性労働者が働いていた。のちに鶴彬はその現場からの川柳を多く残している。そのいくつかを掲げる。

玉の井に模範女工のなれの果て

みな肺で死ぬる女工の募集札

監督に処女を捧げて歩を増され

休めない月経痛で不妊症

嫁入りの晴衣こさえて吐く血へど

子を産めぬ女にされた精勤証

吸ひに行く——姉を殺した綿くずを

もう綿宵も吸へない肺でクビになる

鶴彬が生まれ育ち明治四十二年から大正まではどのような時代であったのかここに掲載してみる。

○明治42年・伊藤博文が旧満州ハルピン駅にて暗殺され

た。石川啄木「食ふべき詩」書く。

○明治43年・幸徳秋水らによるとされた大逆事件おこる。

「時代閉塞の現状」。

○明治44年・鶴彬2歳幸徳秋水らに死刑判決、死刑執行される。元始女性は太陽であった(平塚らいてう)。

○明治45年・鶴彬3歳大正元年 石川啄木死す。「大正川柳」創刊。悲しき玩具(石川啄木)。

○大正2年・鶴彬4歳。阿部一族(森鷗外)岩波書店開業。斎藤茂吉「赤光」、石原修「女工と結核」。

○大正3年・鶴彬5歳。第一次世界大戦始まる。「新思潮」創刊。「こころ」夏目漱石。

○大正4年・鶴彬6歳。尋常小学校入学。「あらくれ」徳田秋声、「羅生門」芥川龍之介。

○大正5年・鶴彬7歳。「貧しき人々の群れ」宮本百合子「鼻」芥川龍之介。

○大正6年・鶴彬8歳。ロシア二月革命。「カインの未商」。

○大正10年・十二歳。鶴彬高等小学校入学。

○大正12年。十四歳。高等小学校卒業。第一次共産党弾

庄。関東大震災（九月一日）、大杉栄、伊藤野枝ら三名虐殺。

○大正14年・十六歳。北国新聞に自由詩「健全なる哀愁」発表。次の川柳を発表している。

銭呉と出した掌は黙つて大きい  
暴風と海との恋を見ましたか

○大正15年、昭和元年。十七歳「氷原」田中五呂八主宰に参加。大阪に出て町工場の労働者。この年に次の川柳を書いている。

枯枝に昼の月が死んでいる風景  
菩提樹の蔭に釈尊糞たるる  
的を射るその矢は的と共に死す  
神様よ今日の御飯が足りませぬ

57 大阪へ出てその風景を目にした鶴彬は次のような詩を「北国新聞」に載せた。その一部を書く。

大阪放浪詩抄

(A)

—大阪の顔—  
はじめて見た大阪の表現は

石炭坑夫のやうに

くろずんでゐた

軽いちつそくをおぼえる空気に

ああ秋はすばやくしのびこみ

精神病者のごとき街路樹は

赤くみどりを去勢されてゐる

—思想的小景—

資本主義の工場—

二ヒリスの煙突—

蒼空は二ヒリスムティックに憂鬱だ

その上で太陽が焦らだつてゐる

—大阪の宗教—

あへかにも  
あへかなる

夜の道頓堀こそは、

二十世紀の象徴よ、

らんじゅくせる

文明のるつぽよ

五色に乱舞する、光、光、旗、旗、旗、

ラチオ

カフエー

日本料理

淫売家

劇場

とくに偉大なのはキネマ館です

ピンポンのやうに軽快な若い恋人諸君、

サンデカリズムを失念したプロレタリア諸君、

貞操を売りにたがってゐる近代的筋肉労働者諸君、

憂鬱なる精神衰弱者諸君

いんさんな梅毒第二期患者諸君、

さては道化じみた近視眼諸君、

貴婦人との恋を憧憬してゐる文学青年諸君

手淫常習者の不良少年諸君

処女性に破りたがってゐる不良少女諸君

らは

手に手にまつかなる性慾の花をかざし

あたかもふるさとの老人らが

阿片宗教に陶醉するために

朝々寺院の偶像礼拝に群れ急ぐごとく

キネマ館になだれこみます

あゝキリストは

神秘なる天国におとぎばなしを話し

釈尊は菩提樹に黙想してゐるために

あやしげにもけんらんな装をこらした

キネマ俳優が

宇宙の王座にすわりこみ

音のしげきで脳細胞の調節が乱れてしまった

世紀末的人種のささげ

多大なる喝来と花輪に荘厳されてゐます、

(彼らの聖書の序節には

酒、恋、生殖器、の三尊を説いてありませう)

この話はまだ続くのだが、大阪に来て鶴彬は巨大な都市の工業地帯に触れ、その日常が激しく自分に襲いかかるのを感じている。

この時のことをのちに次のように書いた。

「・・・その頃僕は家の事情のために田舎から大阪へ出て、就職難のために身心をすりへらしてゐたのである。今でも忘れることの出来ないのは、四貫島の友人の下宿で、仕事探しに疲れうんでもう街に出かける勇氣もなく汚い浦団にくるまりながら『氷原』における森田（注、森田一二）と田中（注、田中五呂八）の論争を読みかへしていたのが僕の姿である。神秘か科学か、現実か超現実か、こう考えてゐる僕の胃袋は、まさに今日の現実を飢えてゐたのである。パンえを得なくして何の思索があらう。仕事につかなくしてなんの文学があらう。僕はむしろ頭脳で考えるよりも胃袋で直観したのである。まもなく僕はある汚い工場に入った。田舎の小ブルジョアの家風に風あたらずで育った僕は、はじめて味わった都会

の生活の嵐に吹きまわされ、工場の生活が骨身にしみこませる資本主義の矛盾に痛みつけられ、もはやこの世に超現実なものは何ほども実在しないことを体感したのである。・・・（田中五呂八と僕）」

ここに鶴彬の少年からの脱皮がある。

鶴彬はこの後故郷へ帰り、その後昭和二年十八歳の時、森田一二に伴なわれてはじめて井上剣花坊宅によるのである。

ここで井上剣花坊の略歴を書く。井上剣花坊は本名幸一で明治三年（一八七〇年）六月三日、山口県萩市に生まれた。吉田松陰、高杉晋作等に影響を受けたと言われ、毛利家に仕えた家柄であつた。十五歳で小学校教員となり、漢字を学んだ。二十三歳で「鳳陽新報」の記者になつた。この頃からジャーナリストとしての方向を得た。

三十四歳（明治三十六年）のとき上京して日本新聞社に入社した。この「日本新聞」紙上に、現代の時事川柳となる「新題柳樽」を掲載したのである。「日本新聞」の社長は陸羯南しかなんで青森県出身、主筆は古島一雄である。

井上剣花坊は三五歳の時（明治三十八年）柳樽寺川柳

「大正川柳」誌を創刊した。

この柳樽寺とは川柳の元となつた柳樽やなぎだるのことで、古川柳の秀句が多く集積されている。

井上劍花坊とは自分のことをユーモアをこめて「柳樽寺和尚劍花坊」として扱っている。

初代の柄井川柳の名をとつて「川柳」は生まれたのであるが、柄井川柳は「選者」としてすぐれていた。この柄井川柳の秀句の中から更に選句したものが「誹風柳多留はいふうりゅうたろう」でこれを成しとげたものが柄井川柳ではなく、呉陵ごりょう軒けん可有かゆうという人物である。柳多留初編から数句を示してみよう。

かみなりをまねて腹かけやつとさせ

米つきに所を聞けば汗をふき

本ぶりになつて出て行く雨やどり

寝て居ても団扇のうごく親心

子が出来て川の字なりに寝る夫婦

役人の子はにぎにぎを能く覚え

井上劍花坊は川柳中興の祖と呼ばれる。それは古川柳

（柳多留）には秀句が多かつたが、柄井川柳亡き後、川

柳が狂句へと墮落していかつたからである。この狂句から革新的川柳を取りもどすことを劍花坊は論じたのである。劍花坊は「改新の心掛無き者は川柳家に非ずし

「川柳革新論」「プロレタリア文学とブルジョア文学」

「川柳王道論」「川柳裸体論」「令刺的洞察の裸体詩、

熱愛的共感の社会詩し等多くの評論を展開した。それが

劍花坊の残した「川柳」「大正川柳」「川柳人」誌上に残っているのである。ちなみに先に示した「誹風柳多留」が刊行されてから今年（二〇一五年、平成二十七年）は二百年の年となつてイベントが八月東京で行われる。

鶴彬が井上劍花坊宅をたずねたのは先に述べたように

昭和二年であるが、この時劍花坊は五十八歳であつた。

鶴彬が十八歳であり、親と子のような関係である。そして

その時劍花坊と妻の井上信子には二十歳になる娘の井

上鶴子が居たのである。

井上劍花坊の川柳作品を掲げる。

米の値を知らぬやからの桜狩

かげ膳のぬしは草蒸す屍なり

冬枯に江戸を葬る鈴の音

咳一つ聞えぬ中を天皇旗

妾宅の裏手へかかる労働歌

飢えたらばぬすめと神よなぜ云はぬ

あの船のどれにも帰る港あり

アーメンを祈れど年の暮は暮

金銀の中に貧しい飾り職

教会のマリア学んだ噂なり

青春の血といふ年で釈迦悟り

人間の型をエホバは土で捏ね

美的生活とは腹ふくるるわざなり

天を憎んで長者二代なし

大工場周囲の家根に日を当てず

若き日に結婚と言ふ陥し奔

金殿に王者の骨のただ孤独

ブルジョアの秘書等めかけら花がるた

大戦のあとの内地に寡婦の数

汽車の窓区切り区切りに飢餓の村

明日腐る魚を長屋の晩の膳

これらの剣花坊の川柳を見ながら、鶴彬は「井上剣花坊石川啄木」「井上剣花坊についての覚え書」のすぐれた評論を書いている。

これらの評論については又別の場で書かねばならないが、鶴彬は次のように言う。「……啄木が明治短歌に近代的内容と表現をあたへた前衛とすれば、われわれは井上剣花坊をもつて、明治川柳を近代生活に近づかした先駆者として対比しようではないか。亦、啄木がこの国の文学のために『時代と人間の真実』を吹き込んだ第一人者とすれば、剣花坊は『人間』を通じて『人間や社会の真実』文学化したと答えようではないか。……

(井上剣花坊と石川啄木)「そして又「……結論として言ひ得ることは井上剣花坊の存在は今日の新しい川柳にとつて、単なる墓標であつてならぬということである。いやかへつて今日の川柳はいまそのあらましを見て来たやうな剣花坊の遺産の上に立つてゐるものであるこ

とをさくらねばならないものである。この偉大な巨匠の遺産を正しく批判的に学びとりうけついで行くことの中にのみ、明日の川柳の健康な開花が見られるであらう。

・・・（井上剣花坊についての覚え書）と論じている。ここに鶴彬の石川啄木と井上剣花坊に寄せる熱い精神を見ることが出来る。鶴彬は少年の頃から石川啄木を兄のように思いつづけた。だから彼は石川啄木の歩いた道や短歌、そして詩や評論を細かく研究して我がものとしていたのである。ひとつの見方をすれば、鶴彬は石川啄木の到達した浪漫主義から自然主義そしてソーシャリズムを辿り、啄木の死よつて辿り着けなかつた道を歩いていこうとしたのではないかと私には思える。

先に鶴彬十七歳までの川柳を示したか十八歳から彼の言うプロレタリア川柳を見ていこう。ここに時代の破片がある。

十八歳（昭和二年）

頬に立つ冬の破片のするどさや  
蟻ついに象牙の塔をくつがへし

哲学の本読む窓の雀の恋

十九歳（昭和三年）

文明とは何骸骨のピラミッド

めかくしをされて阿片を与へられ

ロボットを殖やし全部を誅首する

肺を病む女工小作争議の村へ

退けば飢えるばかりなり前へ出る

屍みなパンをくれよと手をひろげ

一滴の血を搾らせせるなど腕を組み

学校へ会社へ別れていけといふみちだ

二十歳（昭和四年）

血を啗いて坑をあがれば首を誅り

つけ込んで小作の娘買いに来る

かまきりの斧をみくびる蟻の群

肺を病む乳房にプロレタリアの子

二本きりしかない指先の要求書

猥談が不平に変わる職場裏

生きるための葬儀会社のストライキ

資本家の組合法に畏こまり

二十五歳（昭和九年）

地下にくぐつて

春へ、春への

導火線にならう

種粃も

喰べつくした

春の田の雪

踏みにじられた芝よ

春よ団結の歌で

うずめろ！

明日の火をはらむ石炭がうづ高い

生命捨て売りに出て今日もあぶれ

自由の旗の下に

飢餓とは知らず

胎内の闇に

生まれる日を待つてゐる

農林予算が

軍艦に化けて

飼猫までたべる冬籠り

洪水（連作）

花つけた稲へ

増水の閘門あけつ放す

ダム！

石ころ原が美田になるまで

情け深い

地主さん

これしきの金に

主義！

一つ売り 二つ売り

首を縊るさえも

地主の

持山である

凶作地帯——渡辺順三におくる

涸れた乳房から飢餓を吸ふてゐる

半作の稲刈らせて地主のラジオ体操

凶作を救えぬ仏を売り残してゐる蕾

食ふ口をへらすに飼猫から食べはじめ

一粒も穫れぬに年貢の五割引

凶作の村から村へ娘買い

ふるさとは病ひと一しよに帰るとこ

売物になる娘のきれいさを羨やまれ

奪はれた田をとりかえしに来て射殺され

二十六歳（昭和十年）

血を吸ふたままのベルトで安全デー

玉の井に模範女工のなれの果て

売り値のよい娘のきれいさを羨まれてる

みな肺で死ぬる女工の募集札

二十七歳（昭和十一年）

ざん塚で読む妹を売る手紙

もう売るものがなく組合旗だけ残り

貞操と今とり換へた紙幣の色

納米にされる小作の子と生まれ

村々の月は夜刈りの味方なり

暁を抱いた闇にゐる蕾

枯れ芝よ！団体をして春を待つ

吸ひに行く、姉を殺した綿くずを

働かぬ獣どもさかりに来て銀座の夜ひらく

こんなでつかいダイヤ掘ってアフリカの仲間達

生き埋めよ 豚より安い涙金

初恋を残して村を売り出され

城西消費組合の家建つ（連作）

奴隸ではない女らのヨイトマケ  
親綱をとる井上信子まだ老ひず  
インテリが疲れて女土工起ち

二十八歳（昭和十二年）

もう綿くずも吸へない肺でクビになる  
夕マ除けを産めよ殖やせよ勲章やろう  
葬列めいた花嫁花婿の列へ手をあげるヒットラー  
五月一日の太陽がない日本の労働者  
エノケンの笑ひにつづく暗い明日

しやもの国綺譚

昂奪射たれた羽叩きでしやもは決闘におくられる  
嫁ぎ手のおんどりを死なしてならぬめんどりの守り札  
賭けられた銀貨を知らぬしやもの眼に決闘の相手ばかり  
決闘の血しぶきにまみれ賭けふやされた銀貨うづ高い  
遂にねをあげて斃れるしやもにつづく妻どり子どりのく  
らし

勝鬨あげるしやものど笛へすかさず新年の蹴爪飛ぶ  
最後の一羽がたほれて平和にかける決闘場

しやもの国万才とたほれた屍を縄がむしつてゐる  
おんどりみんな骨壺となり無精卵ばかり生むめんどり  
おんどりのいない街へ貞操捨て売りに出てあぶれる

骨壺と売れない貞操を抱へ淫売どりの狂ううた

稼ぎ手を殺してならぬ千人針

銀針に刺された蝶よ散る花粉

枕木は土工の墓標となつて延るルート

昭和十二年に「しやもの国綺譚」を「川柳人」二八〇  
号に載せた鶴彬は、社会が暗黒の世、つまり侵略戦争を  
はじめた日本軍国主義の激流の中にあつた。この事を少  
し書く。

昭和五年・農村豊作飢餓におそわれる。昭和恐慌、欠  
食児童、娘の身売り。

鶴彬、金沢七連隊に入営、連隊長質問事件により運営  
倉に入れられる。

昭和六年・満州事件勃発、鶴彬、金沢七連隊赤化事件に

より、軍法会議にかけられ大阪衛戍監獄に収監される。  
刊期一年八ヶ月。

昭和八年・ドイツにヒットラー内閣成立、小林多喜二虐殺される。日本国際連盟脱退。

鶴彬、年末二等兵のまま刑期終え除隊。

昭和九年・東北地方大凶作。餓死者激増する。

昭和十年・美濃部達吉の「天皇機関説」が右翼や軍部の排撃対象となる。

鶴彬「町の織物インフレと女工たち」（文学評論）に書く。十月東京の滝井方（母の再婚先）に寄る。井上信子の川柳誌「蒼空」を助ける。

昭和十一年・二・二六事件発生、北一輝も処刑される。

「鶴彬に生治を与へるための会」発足した。

昭和十二年・十二月二日鶴彬「本材通信社」に出勤と同時に特高警察に検挙されて東京都中野区野方署に留置される。

昭和十二年の十一月十五日発行の「川柳人」（井上信子主宰）No.21に鶴彬は次のような句を発表している。

高粱の實りへ戦車と靴の鉞

屍のみないニユース映書（映画）で勇ましい

出征の門標があつてがらんどうの小店

萬歳とあげて行つた手を大陸において来た

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動き知るころ骨がつき

この「川柳人」を見て鶴彬を密告したのが大阪の「三味線草」主宰の森鷗牛子であると言われる。その根拠として森鷗牛子は「……現下国民精神総動員、遵法週間等の叫ばれる時、吾等の柳壇を暗くするこれ等の徒に対しては、更に更に監視を要するのである。しかし依然として反省せざる場合は、吾人は別の手段によつて善処したいと思ふ……」……「……思ふても見よ、現下の日本を、吾々は川柳をいふ立場から見なくても是等の作品はいかに非国家的作品であるからに慄然たらざるを得ない。主宰井上信子氏と発行兼編集人大谷五花村氏の明答を欲するものである。然る後に於て吾等は正しき川柳道擁護のために、亦国家的立場より断平として所信に邁進せんとするものである。（鷗牛子）」として告発した。

詩人の秋山清と木材通信社で働いていた鶴彬は自らの川柳作品によつて告発され昭和十三年九月十四日、赤痢にかかったまま豊多摩病院で死去した。二十九歳であつた。

鶴彬の遺骨は長兄喜多孝雄が抱きかかえて岩手県盛岡市の光照寺墓地に埋葬した。

喜多孝雄は盛岡市の中津川下流に住み染め物業をしていた。鶴彬の遺骨にまで特高がつてきたと喜多孝雄の妻（喜多多鶴）が言っている。

喜多孝雄は石川県にある喜多家の墓を光照寺に全て移している。墓石に鶴彬（本名喜多<sup>かっし</sup>一二）昭和十三年九月十四日、父喜多松太郎大正五年九月二十一日、母（再婚）滝井寿々昭和四十五年十二月十三日、兄喜多孝雄昭和三十三年六月二日その他が彫られている

私達（佐藤岳俊・故高橋竜平・吉田成一）は昭和五十七年九月十四日、盛岡市松園観音墓地に「手と足をもいだ丸太にしてかへし鶴彬」の碑を全国の人々の協力金により建立した。その後毎年鶴彬、井上剣花坊祭を九月に行っている。この句建立三十年の平成二十四年九月に、

鶴彬の眠る光照寺にこの碑を移転建立した。鶴彬は岩手人となつて眠っている。

現在、戦後七十年として暗雲がたちこめ、鶴彬の時代のような「秘密保護」「集団的自衛」「原発の再稼働」「九条を消す改憲」等が出て来ている。被爆国から生まれた平和憲法を壊す現政権である。私は歴史から学ぶ「鶴彬と井上剣花坊」を推し進めて平和を語りつづけて行動していきたいと思つてる。

（文中敬称略す）

（二〇一五年一月三十一日）



コケシ（わう）罎につける

入れ物

# 「戦争」を読む・15

「週間きたかみ」「詩歌春秋」より

斎藤彰吾

約束

佐川亜紀

星の長い小指と

約束しました

地球が生きていけるように

地球で生きていけるように

闇の黒い紙に書きました

シジュウカラの羽で

馬のひづめで

牛の乳で

草の汁で

人の言葉で

日本語で

さまざまな言語で

放射性物質の針千本が突き刺さる  
人に

山にも 海にも 子供にも

約束を破った大人

生命の約束を

国の約束を

これいじよう破ってはなりません

その言葉は

もつと遠くから来たのです

もつと広く集めたのです

ずつと昔から渡されたのです

ずつと未来から届いたのです

私達の中から生まれたのです

私たちの祈りを記したのです

平和への願いを

消してはなりません

アジアの地にたくさんの指の骨が

見つからないまま埋まっています

詩誌「詩人会議」14年一月号から。新年にふさわしく、

希望と勇気をひびかせてくれる「約束」をここに掲げました。同じ作者が前に発表した「生命の目盛」という作品があります。「社会の計測器が狂って」いるので自分で「新しい生命の目盛を持つ」べく「鳥に魚に牛に／ヒロシマ・ナガサキの子供に／フクシマの子供に／十萬年後の地球にたずね・・・生きるための目盛を／求めなければ」（詩集『押し花』）と現実確認した地点に立ち、この「約束」が静かな語り口で出現します。

一連は地球の環境が今以上悪くならないようにと、星との指切りげんまん、そして生き物たちは、それぞれ「地球で生きていける」ことを念じての発信。二連は九条を始めとする条項の「約束を破った大人」に向け、これ以上破ってはならんと戒めます。なぜなら約束の言葉

は、人類の叡智と魂から生まれた崇高なものだから消せないのです。前出の詩集『押し花』は第45回日本詩人クラブ賞を受賞しました。

(14・2・6 「詩歌春秋」/480)

### 希望のゆくへ

佐藤 怡當

戦争は領土盗るもの挑発を繰り返す国の正義は見えない

我慢の緒切れよ切れろと挑発を繰り返す国の平和の本音

敗戦は天災ならず苦しみを知らざる人のヤスクニ参拝

結局は軍備拡張戦ひは必至のことか近未来

丁寧な言葉・説明オブラート聞きたくもなし本音聞きたし

憲法の国民主義が少しづつ削られていく秘密保護法

憲法を護る政府が改正の旗振らむとす漂流の国

国愛す心なければ無抵抗平和主義など夢にも見まい

戦ひに敗れて得たる民主主義問答無用多数に奢る

自惚れは破綻を招く原子力発電のゴミ地球滅ぼす

短歌「手」の会誌「手」第15巻第10号(平成26年2月発行)の「チャレンジ詠」より。

「きなクサクなつた」。昨今、話の合間にこんな言葉が飛び交うようになって気にしていました。一度ばかりじゃない、二度三度あったのです。そこへ地元の短歌グループから「手」が届けられ、右のような「希望のゆくへ」十首を掲出することができました。

さすが短歌「手」の会代表の佐藤怡當氏だなど感心しました。身について五七五・七七のリズムが、十首それぞれ「きなクサイ」様相を見事に摘発しています。

例えば「敗戦は天災ならず苦しみを知らざる人のヤスクニ参拝」「戦ひに敗れて得たる民主主義問答無用多数に奢る」など。そうだとホントだと相槌を打ち、この熱い思いに励まされウレシクなりました。謝謝。

(14・3・20/481)

### 昭和の暗い影

佐藤峰子

筍にわらびぜんまいセシウムの汚染つづきて春の香りは

戦争の傷みを知らぬ改憲論さくらは雪に雨に打たれて

71 「汚染水コントロールされています」世界をめぐる

言葉の虚ろ

反論を許さぬ空気じんわりと既成事実の資料が重い  
すれ違う言葉の刃先とき折りおとこが見せる不敵な  
笑い

甘い汁に群がる合意この国の巧言冷食未来が見えぬ  
原発は再稼働へと動き出す政局がらみの牙むくさま  
に

全原発停止に酷暑しのぎたる事の重さをわれら忘れ  
ず

つづまりは思考回路の貧しさに墮ちゆくまでの時間  
の流れ

どこまでが秘密の範囲あいまいに昭和の暗い影ふり  
払う

短歌「手」の会誌「手」第15巻第11号（平成26年3月発行）。前回に引き続き社会詠を取りあげる。政治家は自分の言動が虚ろに人びとに伝わったと知っていても平氣の平左である。

三首目の「汚染水がコントロールされています」と世界に向けて語ったヒトは、どなただったでしょうか。オリンピックが東京に決まった時のどよめきに、あの「虚ろ」さは消滅したのか。彼は国会答弁の時には、四首目「不敵なわらい」さえ見せてくれた。

ナチスドイツのヒットラーにならなければいいなど、戦中派の皇国少年は心配するのである。私たちは今、イチバンあぶない時間をセシウムと共に生存していることを痛覺したい。

作者は一関市在住の歌人、歌のグループ「游」の会の事務局長をしながら活躍中。

(14・5・1/482)

## 社会詠十人集

遠藤夕力子  
白木蓮の蒼つばき ふくらむこの夕べ地球のどこかで戦ふくらむ

池田眸

なくしてはいけないならば原発を東京都心に造って見れば

いつか来た道のごとくに知る権利ものを言う自由奪う風吹く

福島ふくしまの飯館村は夕暮れて人なき道を猪歩く

平和とは何かを問いつつ戦死者の名を刻みたる梵鐘を撞く

川辺 邦子

気の重き税申告をしたる後もやし三袋百円を買う

中国の旅に車前草目おまほこにすれば政治さておき親しみの湧く

澤田 昌子

とれたての若布わかふ送られ被災地は辛夷こぶしの花の咲いてい  
る頃

高橋 和子

津波つなみの様伝へてくれし川畑さん 五ヶ月過ぎの朝

急逝す

津波には免れたれどその後病に倒れる人あまたあり

大船渡復興なれば是非訪はむわれの視力が間に合へばよし

朝ドラに戦中戦後を思ひ出す夫婦で語るはひもじき記憶

高橋 廣治

原発は誰が認めて作りしかゴミの捨て場も未だ決まらず

志願して征く身は命惜しくなく今の病む身はこたはりてをり

三上美枝子

現在の平和を乱すな被災者も後押しなくば立ち直れない

配給の鯀にあたった姉と母 夕餉ゆうげのニシン焼きつつ思う

渡邊 金雄

春彼岸墓参が出来ぬ避難者に炊き出し配膳忘れぬあの日

高橋和津絵

原発の後のどかにて空席に日溜まり乗せて路線バスはゆく

原発のデータ改ざんせざるゆゑ解雇されたる人ありと知る

佐藤 怡當

短歌「手」の会誌「手」平成26年2月〜5月号より。

収録の一九首は、鏡のように今の世の明暗をさまざまに写しだした。被災と原発事故、秘密保護法から戦争に向かう危険な動きに「配給の鯀」という語も飛びだした。日中関係も七首目にほの見える。歌にはもつともつと社会詠を望みたい。

(14・6・12/483)

七 並 べ

吉野重雄

東京からの姉

奈良からの 弟

北上からの 妹 妹

それに滝沢の 私

兄弟姉妹五人で済ませた

父の十七回忌 母の二十七回忌

二本の卒塔婆を添わせて

夫婦宣嘩の仕納めと引導を渡す

(二連中略)

暮れて

御所湖のほとりの温泉旅館に宿を定め

夜つびて酒を飲み語り合う

血圧が高いのは父方

喘息ぜんそくが出てくるのは母方

白髪になるのは父方

薄毛が気になるのは母方

筆無精で金釘流は父方

筆まめで達筆なのは母方

背が高く痩せているのは父方

背が低く太りやすいのは母方

山好きで少々気の弱いのは父方

涙もろいくせに芯が強いのは母方

トランプの七並べのように

てんでに手持ちのカードを並べてみる

どんなカードも持つているのは 姉

パスを繰り返すのは 妹たち

夜更けて兄弟姉妹五人

何十年ぶりに枕を並べて寝てはみたが

眠れたか 眠れなかったか

開ければ

姉は東京へ

弟は奈良へ

二人の妹は北上へ帰って行き

七並べをすることは もうない

残された私は

並べきれなかったトランプを

そつと懐にしまい込む

詩集『隠れ里』（09・「堅香子」の会刊）。両親の法

事に集まった兄弟姉妹の五人。何十年ぶりかで温泉宿に一泊する。それぞれの道行きには両親からの遺伝子があつたことに気がつく。どこかトランプの七並べのような人生のプリズムだった。

「七並べ」の発表後、暫くして作者の姉で歌人の弘子さんが逝き、作者もまた今年三月十九日の夜忽然として去つた。主宰誌「堅香子」第15号の編集申中だった。同誌は近くの追悼詩集として発刊される。「七並べ」にえがかれた平和で幸せな情景は、いつまで続くのだろうか。集団的自衛権の閣議決定の先きには戦争の暗雲がはらんで

(14・7・24/484)

75

忘れてはいけないこと

高たか木ぎ秋あき尾お

ふるさとを遠きにあつて思つていた。

いつまでも脱藩きぶんの若者であつたような気がしている。

震災が起きて数々の不幸が起きた。

忘れたいここばかりだが

忘れてはいけないことが起こつていた。

それでも私は遠くの風景と思つていたのかも知れない。

たしかめにふるさとを訪ねてみると

昔の職場が礎石だけの風の通り道になつていた。

ここで労働したのだという思い出は枯れていた。

私は情じょうのない輩ともがらなのだ。

小雪の降るなかとつとつと歩いてみた。

ひどく情けなく生きてきたなと

かつては賑わつた商店街の跡を

とつとつと釜石駅につく。  
 駅は変わつてなそうに見えたが  
 避難仮設住宅の室内チラシが置いてあつた。  
 尋ね人はいずこなのか。

私が通つた小中学校の校庭は  
 避難仮設住宅のひしめく場になつていて  
 訪ねて仕方のない事情が漂つていた。  
 痛い心が燕のように飛び交つている。

洗濯物が白くはためいていた。

個人誌「鵠」（ぬえ）第5号（14年6月東京都足立区  
 多摩三郎企画発行）。

「小雪の降るなか」、被災後のふるさと釜石を久しぶりに訪ねた。礎石だけになった昔の職場や「かつては賑わった商店街の跡」の無惨さを目にし、いつか「とつとつ」と歩いていて自分に気がつく。「ひどく情けなく生きてきた」んだなとも述懐する。

「通つた小中学校の校庭は／避難仮設住宅のひしめく場」になつていた。友だちや同級生を探したいと思つたが、その気持ちさえも萎えさせ空しくなつてしまった。けれども避難仮設住宅地で見かけた白くはためく洗濯物。あの光景が私の「痛い心」「暗い心」にいつまでも残つている。ふるさとを思う私の僅かな救いとなつたようだ。

一九四七年生まれ。釜石市小佐野出身。詩集には『けもの水』、『その心の準備』など八冊がある。

(14・9・4/485)

### 一輪のコスモス

草 倉 哲 夫

今日私は 漠江ぼんがんに沿つて上る

ナヌムの家へ

重い漠江の道

この国の歴史の水面に 我々は  
 なんと多く映つているのだろう

だから 私は行く

イバラの束を背負い

山里のほそい道を

どう迎えてくれるのだろうか

老いた慰安婦たち

対岸の火事を見るまなざしで

ぬくぬくと戦後を生きた僕らを

トウガラシで傷口をつつくように

まるはだかのウサギに塩をすりこむように

ぐるぐるとまわる真昼のナムヌの家

けれどそこには

思いもかけず 若いうからがいた

「ハルモニー ハルモニー」

私たちのためにおばあさんと呼んでくれた

生活をともにする娘

化粧気のない一日本人女性

訊けば 大学を休学して来ているという

そして今

一生をこの里で送るか迷っているという

山里の稲は黄金色の穂をたれ

トウガラシの実 赤く

今は秋

私たちに別れの手をふる娘

一輪のコスモス

※1ハルモニーおばあさん ※コスモスⅡ平和

の意。「ナムヌの家」では、かつて日本軍の慰

安婦だった高齢の韓国女性が、日韓の若者のボ

ランティアスタッフとともに共同生活を送って

いる。韓国京機道広州市にある民間施設である。

朝倉哲夫詩集『夕日がぼくの手をにぎる』増補版／12  
年11月朝倉書林刊。

老いた元慰安婦たちと日韓の若者ボランティアスタ  
ッフが共同生活をしている「ナムヌの家」。そこへ向か  
う漢江ばんがんの道は辛く重かった。イバラの束（戦争の影）

を背負っていたから。どう迎えてくれるのかも不安だった。

訪ねたところ、それが全く消しとんでしまう。「化粧気のない」若い女性（親族）が顔を出し、いきなり「ハルモニー」（おばあさん）と二、三度呼んだのだ。出会いが美しい詩になった。大学休学中の彼女は、その時一輪のコスモスであり同時にまた平和の民間大使にも見えきたろう。福岡県在住の団塊世代。

(14・10・16/486)

## 百姓少年

栗くり 和わ 実みのる

田植えと云うと

天秤てんびんぼう 稲籠いねかご 藁草履わらぞうり

水びたしの自分の細い足

お昼はソーメン

苗はきちんと揃え／水で上下にゆすり

泥を落とす／のをきびしく言う父の黒い顔色

昔の百姓は鶏にわとりを雛ひなから育てる

手間がかかる

百羽もいれば

つんだつんだで下のは死ぬ

しだいに大きくなり止まり木に乗せても

すぐ下りる

暗くなるまで止まり木に

のせつづける少年の役めをする わたし

タマゴは少量でも農協に売る

体の弱い私は／その当番となる

丈夫な人は／日取り※に行き

お金があるので

帰りに農協で酒をすこしのむ

昔のことだ

畑は全部桑の木ばかり

私は学校の帰り

クチビルを紫にして帰る

学校の先生は

織屋の子供をひいきにした

遊びは

センソーゴッコ／ばかりした

私はいつも死ぬ役ばかり

つきころされる

大人になったら

今度は白菜ばかり作る

そして各家々には

木の箱が帰ってきた

死体のないままの葬式が続いた

※「日取り」は、日雇い労働のこと

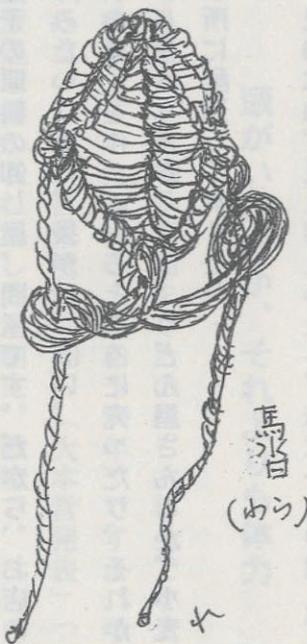
詩集『父は小作人』（'14年10月コールサッタ社刊）。

一九二八年、作者の少年は百姓の子として生まれた。五歳の時から小作人の父に従い田畑を耕してきた。その父を題材にした作品がある。詩集の題名となつてゐるその終連を引く。「米は大八車に山のように乗せ／大地主の

元にはこんだ／大八車は長い列を作つていて／私は汗を流して／寒いのでこ道で大八車の後押しをした／少年達で働くのは小作人の子供ばかり（「父は小作人」）。大八車とは、荷物を運ぶ大きな二輪車で八人分の仕事の代わりをするので、こう呼ばれていた。

昭和初期、静岡県地方の小作農民が働く姿の一面が、いま見られ桑の実など共感を誘う。終連三行は戦没農民兵士の遺骨箱のこと。飾らない即物的な言葉のメリハリが魅力豊かである。静岡県浜松市在住の農民詩人。

（'14・11・27／487）



80 「『いまどぎ、そういう歌を

うたうのは何事だ!』

って怒られたの

いまこうして合唱してるのは  
そのことへのわたしの  
レジスタンス」と



—— 花巻市御田屋町 ——

押切 郁さん (85歳) は

語る

「今度の母さんどう?」

—— 生まれたのは水沢です。あのね。お菓子とかお菓子の原料、お砂糖とか。当時、メリケンコと言ったわね。菓子の原料の卸し屋、問屋です。だから、お店の隅、倉庫みたいな所に、袋がいっぱい。

お菓子を作っているところに売ったり、それから、おソバ屋さんとか、ホラ、うどん屋さんとか、小麦粉を使う所に配達して歩くとか……。

兄弟はね。兄と姉とわたし、妹は一人の四人ですね。それに、いとこ。小さい頃に両親に別れ、父が引き取って兄弟のように暮らしてた。

兄は、年が十四も離れでるがなあ……、一緒に暮らした記憶はあまりないですね。

水沢だから、商業高校あるでしょ。商業高校に入れば奉公に出されるんだもの。ホラ、家を継ぐため。大きな菓子問屋とかにね。

兄は、宇都宮の方に行ったかなあ……。だから、家にいないわけですよ。そのうちに、二十歳はたちになれば召集令状でしょ。兄は、柔道部だったから、立派な体格、甲種合格。出征しました。親戚や近所の人たちを招き、壮

行会をしました。それから毎日、床の間に陰膳を供え、兄の武運長久を祈っていました。

兄が出征した翌年の元日、父は家族を連れて、元朝参りです。駒形神社、日高神社から町内全部の神社を回ってお詣り。兄の無事を願う、父の神だのみだったと思います。

母はわたしが三年生の時に亡くなりました。盛岡の日赤に通院したりしていましたが。

兄は、朝鮮の羅南という所にいたので、母が死んだので連絡したら、還つて来たんですよ。何日か、かかつて葬式は済んだ後だった。

間に合わない。遠いものね。

父は、再婚しましたね。わたしも小さいから、妹もいるしね。横川目の方から来た人。

とにかく一生懸命、家のために働いた母です。子どももありませんでした。わたしたちも可愛いがつてもらつて……。だから別に、継母だから、いじめられた事はないけど、世の中の人は、それを聞いたがるのね。それがいやで……。

81 床屋さんなんかに行く

「今度の母さんどう？いじめられない？」  
そういう風に言う。継母っていうイメージね。

可哀想だなと思つた。母が……。子ども心にも。

周りの人が聞き出して、いじめられている方が、うれしいっていうか。(笑)うれしいわけではないが、話題にしたいのね。言わなかつた。別に、わたしはいじめられでもないし、母をかばいたい気持ちだったね。

姉はねえ。もう、二十歳で亡くなりましたもの。妹はいますよ、水沢に。だからいまは二人。息子がね。「八十過ぎて、姉妹でいるって、いいことだね」って言うの。(笑)

### 頭がいいとか、それよりも体力

——太平洋戦争が始まったのは、六年生ですよ、十二月八日、(一九四一年—昭和十六年)ですよ。学校に行つたら、「本八日未明」って、「大本営発表」って、学校放送で聞かされました。朝に。教室で。

女の先生だったけれども、深刻な顔をして、

「皆さんは、天皇陛下の赤子せきしです」と言われた。なんの意味も分らないけれども、「赤子です」って言われたの。大変な事だなということしか分らない。

次の年が女学校の受験でしょ。そうですよ。試験受いで・・・。一クラス五十人ぐらいで、そこから入ったのが十人ぐらいしか入らないですよ。小学校は、六組か七組ぐらいまであったけども、女学校は二クラスしかないんだもの。

近辺の農村の人たちも、一人か二人入る。

村長の娘さんだとか・・・。

その時の試験がねえ。もちろん筆記試験、口頭試験もあるんだけど・・・。それまではね。

わたしたちの時は、口頭試験だけだったの。

一人ずつ行つて・・・。先生は何人か、ずらつと並んでる。わたしが覚えているのはね。お雛様の雛壇のこと聞かれたのよ。それが、天皇陛下のあれだとか、なんとかみたいな。後は、雨が降つて、水蒸気になつて、雲になつて、なんとか、かんとか、そんなような質問だった。わたしたちの一級前まではね。筆記試験もあったのよ。

わたしたちは、口頭試験だけだった。最近になつて聞いたのは、あの時のね。試験の紙がながつたのサ。つて言うのよ。(笑)

頭がいいとか、女学校だからある程度のレベルもあつたけれども、それよりも体力。丈夫なのが良かった。体力検査があつて、走つたりなんかしてね。

それで、ホントに頭がいい人だつて、みんなが認める人が落ちた。体力測定で成績が悪がつたんだね。気の毒だなと思つた。

後で、何回もクラス会するでしょ。その人は一回も来たごどないよ。

だから、そういう時代ですね。女の子は別に戦争に征ぐわけじゃないけども、体の丈夫な人。勤劳奉仕にも行かなきゃならないし・・・。

落ちた人は、次の年また受験するよ。同じ齡でも一級下になつた人、何人もいるよ。うでも、それも受けなかつたんだね。

だから、戦争になれば、弱い者、障害者を持つてる人は置き去りにされる。

## 勤勞奉仕に行き聞いた

### モーツアルトとの子守唄

——一年生の時にはまず、女学生らしい事はやったよ。でも、一年生の時から、農村に勤勞奉仕に行きましたね。つまり、出征兵士の家に行くの。水沢だと周りは農村地帯で佐倉河とか。田植えもしたし、稲刈りもしたし、田の草取りもしたし。繩<sup>な</sup>縋いもしたし、みんなやりまた。

(笑)

割り当てられて、上級生と一緒に。一軒の家に十人くらい。農家もホラ、大つきいから。一週間か十日ぐらい、泊まりがけで……。

田の草取りが一番ひどい。ヒルもいたよ。

吸い付いて離れない。暑い時期でしょ。葉が目にはささったり。顔にささったりで、あれが一番つらかったね。稲刈りも、ちゃんと束ねましたよ。シュツ、シュツとこうやって、ぐつと回して束ねた所に入れる。そりゃもう、出来たよ。

83 一年生、二年生、三年生と、毎年。戦争はずつと続いてるでしょ。どんどん農家には働き手がなくなる。

——一年生、二年生の時がなあ。忘れられないのはね。

あの、夜になるとね。そのその……。奥さんっていうのか、主婦がね。あの……。子守唄を歌うの。子どもさん、二歳か……。それがね。モーツアルトとか。わたしたちは寝るでしょ。疲れて、疲れて寝るところえね。台所の仕事をしながらね。きれいな声で歌う。モーツアルトだのシューベルトの子守唄をね。

「ねむれよい子よ……」とか歌うの。ドイツ語だったじゃないかなあ。そういう歌は、歌ってはダメな時代だから。

自分の子どものために歌ったと思うけど、わたしたちのためにも歌ったと思う。聞こえるような大きな声で……。それが忘れられない。

「お茶の水」を出て、農家のお嫁さんに来たの。主人は、わたしたちの女学校の先生だった。

縁側の一番すみつこの所に、リング箱が重なってたの。それみな本なの。お嫁に来た時、持ってきたんじゃないの。

その人、県の教育委員になったのよ。その時、二歳だった娘さんは、わだしが水高にいだ時（先生として）生

徒で入ってきた。恵子さんっていう子どもだったけども、優秀だった。

「菅原さん！わだし置いて

行かないで！」

——そうですね。三年の二月二十四日。とにかく、それまで毎年、学徒動員令っていう、国の指示が出たわけですよ。それに従ってるだけだからね。学校はねえ。

「学徒動員令」っていう法律だよ。出た時に十四歳以上っていうごどで、丁度、わたしたちが当たったわけよ。上級生の四年生も行ったよ。

身体検査があるのよ。あの頃ホラ、肋膜（痰）とか、肺浸潤とか、そういう人たちは除かれて、全部で九十七人かな。うだつて、一クラス五十人以上いるんだもの。東京の方から、どんどん疎開者が入ってきたから人数が増えるわけよ。毎日のように、一人、二人疎開で来る。縁故だつてね。遠い縁故だつて来る。

昭和二十年、終戦の年だから、ほんとに大変な年よ。

国の方針だもの。家の人たちは「ノー」とはいえないのが、悲しい。だつて、言えない。

いまだつてサ。十五、六の女の子、一人東京にやるの心配でしょ。戦争の最中だよ。もう、東京の方は毎日、空襲がある時だよ。

知らないの。それをわたしたちは……。知らせられない。

甲組は男の先生と、乙組は女の先生と、校長先生が付いて行ったね。校長先生は、すぐ帰ったんだけど。

午後四時頃だつたか……。夕方の列車だつたけどもね。なんかホレ、東京の方も空襲あつたりなんかして、おかれて、おかれて、もう、夜中。一たん。学校に帰ったの。

その日は雪が多がつたし、いっぱい雪積もつた汽車が来ましたつけ。それに乗った。

わたしたちは香気なもんでね。まだ水沢あたりは、食糧難でもないしね。ご飯も食べたし、旅行みたいな気分……。みんなと一緒だし。

東京に行ったごどないんだもの。修学旅行みたいな気分ですよ。

戦争がどういふものか知らないし、教えられないし。親だちは知ってたと思うし、先生方も知ってたと思うけど、それを言えない。

「ダメです。家の子はダメです」と言えないもん。

うだがらね。ある「もらいつこ」って言ったじゃないですか。養女。もらいつこの人がいてとても甘えっ子の人がいたの。

その人が、後からね。ずっと後ろからのクラス会になつて、言ったんだけど。親がね。個人的に病院に子どもを連れでつて、診てもらつて、「大丈夫です」って言われると困るから、別の病院にも行つて、何件か病院に行つて、どこか悪いって言われるように（笑）したと、話したの。

その頃のお父さんつて、厳格だったでしょ。無口でしょ。作文に、「無口な父親が、ますます無口になりました」つて、書いた人もいる。

言いたくても、言えないでしょ。

そういう思いをさせたくないと思うよ。いまの息子だちには……。

——おくれで、おぐれで真夜中に着いて何時に着いたのだが、ぜんぜん分らないけれど、とにかく夜中だった。

上野に近づいてきたらね。あの……。窓がね。丁度、ピンク色になってきたのよ。

そえでもわだしたちは、「あら！東京の色はピンクだわ」なんて。（笑）ピンクが、だんだん真っ赤になってきたの。

びつくりして窓を開けたらね。一面に火の海だった。下町が空襲になった日。上野の周辺、何百軒だが、二百軒だが、全部、焼げて……。

不思議なもので、一軒、一軒から、ポツ、ポツと火が出てる。メラメラツとならないで。

窓を開けたら、そういう光景で、もうびつくりしたね。甘えっ子の養女が、「お母さん！」つて泣いたの。それからつられて何人か、泣いたの。

そしたら、また、しつかりした人がね、

「いまは戦争中で、泣いたりしてはいけません！」と、言う人もいた。

わだしは、どうしたか忘れたけどもね。

ただ、水沢を発つ時にね。汽車が「ゴトン」と鳴った。昔の汽車、動く時、「ゴトン」と鳴るでしょ。「ゴトン」と鳴ったとたん、母親の顔が、パーッと出たの。目の前に。その時に、お母さん心配してるんだなあ、と、思つたね。初めて……。それまでは、あつけらかんとしてたの。

——上野に着いて、とにかく降りたのサ。

そしたら、ホラ、焼け出された人たちで、ホームがいつぱいな。みんな、こう、髪を振り乱して、死んだ赤ん坊を抱いたりね。ポロポロになつた着物の人たちとか。とにかく、もう地獄みたい。ホームいつぱいで……。その間をサ。わだしたち九十何人、行列作つて行くの。間、ひらいてはずれたら大変だしね。八班編成で、八班は一番のビリ、班長はわだしたつたのよ。

みんなが遅れないようにと見ながら、自分も遅れないように、人混みを泳ぐように行かなきゃないから……。

わだし、むがし菅原つて行つたんだけど、

「菅原さん！わだし置いて行かないで！」つて、叫んだ人がえるから、誰だと思つたら先生だった。(笑) 真

剣な顔で、

「菅原さん！わだし置いて行かないで！」つて。その先生、ちよつと、小太りで走れないのよね。(笑)

わだしはもう、みんながとにかく、遅れないように、自分もホラ、大変でしょ。それなのに後ろから追い掛けてきて、先生の心配までするごでないんだもの。(笑) 後ろから、悲しそうな顔、泣きそうな顔をしてくる。軽蔑したよ。でもね。先生も、おつかないのは、おつかないんだと思つて、先生の手、ギョツと引つ張つて連れでたつた。

その先生は、美術の先生でね。横浜からいらしたばかりだったのよ。若くはながつたよ。まあ、横浜から、こんな田舎に来たでしょ。まだ馴れないところに持つてきて、ホラ、三年生の担任になつたもんだから、行かなきゃならなくなつた。先生にしてみれば、ホントに心細いつていうか、そういう目に遭つたわけだから同情したけど、びつくりした。

「なんで先生」と思つて軽蔑したよ。(笑)

## 食べようと思ってもノド通らない

——東横線に乗って、「綱島」(神奈川県)まで行ったの。むかしの温泉町だね。むかしの旅館だから、大部屋と小部屋があつて、翌日は疲れてるから、休んでいいつて、休んで次の日から出勤した。

会社は「元住吉」っていう所にあつて、「東京空港計器株式会社」で、そこに勤務するごごになつたわけ。

食事はいつもその会社で食べる。朝、昼、晩と三食、まず一番最初に出されたご飯。洋皿に盛つたのがね。食堂に入つたらね。真つ白じゃなくて色が付いてんのよ。

うだがらね。これは歓迎のための五目めしだと思つたの。五目には違いないけどサ。何が入ってるか、わけわがない物が入つて、ノドが通らないの。だつてホラ、豆カスとか食べたことない。ご飯粒が少しで、雑穀ならまだいいよ。粟とか麦なら、だつて豆カスなんて家畜の飼料にするんでしょ。交ぜご飯で、五目ではあつたけど、五目の中味はぜんぜん。(笑)そえでね。そういうのつて、ノド通らないもんだね。実際、食べようと思つてもノド通らない。みんな、残したの。食べられないんだも

の。そしたら、次の日から、水沢工場は、ご飯残すがつて減らされたの。(笑)

だんだん、それしか食べる物がないがら、食べるようになったけれども——。

甘えつ子の養女の人は、とうとう食べられながつたよ。そえでもホラ、リュックサック背負<sup>しよ</sup>つて、リュックの中には、お母さんが作つてくれた、あの……。なんていうの、キリセンシヨとかね。保存食、いり豆とか、お餅とか、どつさり持たされてきたわけだ。そんなのでしいでいたわけよ。育ち盛りなんだよ。

いま、家の孫が丁度、その歳になつてゐるの。中学三年生なの。もう、腹いっぱい食べるでしよ。(笑)

「おばあちゃん、あの時、こうだつたんだよ。食べられながつたんだよ」つて、聞かせでるの。

——すぐく先生にね。すぐく叱られたことあるの。一回。あのね。旅館だから、ホラ、大広間があつて、あと、小さい部屋があつて……。部屋割りがね。あの……。背の大きいグループは大部屋だつたのよ。それが一階の大部屋で、二階の大部屋は、背の小さい人たちが

ら順序に何人か入る。

真ん中の人たちはね。五、六人の小部屋があるわけ。みんな、分散して。大部屋にいる。大きい人たちが一番うるさいっていうわけ。(笑)

わたしはその大部屋。いつかね。ホラ、灯火管制といつて、暗くしてるでしょ。電気に黒い布掛けて・・・。

「ちよつとだけ、少しだけ明るくしてみない」つて、誰かが言い始めて、わたしはそこに居て、その黒い布を、こういう風にしたとたん、先生に、頭から湯気が出るぐらい怒られた。

「何事だ!!この宝物!!」

それ以来、わたしたちのグループは、「宝物!」「宝物!」(笑)グループは二十人ぐらいかな。(笑)

なんのために、こんな人が

集まってるんだろう

——働く場所は同じ場所じゃなくて、みんな、バラバラなわけよ。旋盤なんて機械を使う人もあればね。大きな飛行機作ってるわけじゃない。飛行機の計器作ってる

所だから、仕事は細かいのよ。検査係とかいろいろなわけ。

かなり広い建物がたくさんあって・・・。そこに何人かずつ分散してる。

わたしは事務で一人だった。二階が検査室で現場事務は何人かいるが、動員のなかでは一人だけだった。やることは、たいした仕事はなくてね。「この名簿書いてください」とか。そういう事なんか、すぐ出来るでしょ。

ヒマだからわたし、あつち、こつち、遊んで歩いたの。ぜんぜん、叱られなかった。

外の部署の人たち何してるかなと思つて・・・。厚み計る機械でね。みんなの毛を測つたら、「郁ちゃん髪の毛が一番、太かつた」と、言つたりね。

検査室の人たちは、よく働いてるように見えた。検査室の方にまわってくる部品は、弘前中学から来るんだつて。とにかく来て。慶応大学、日本女子大、牛込高女、岩手からは花巻中学、岩谷堂高女、摺沢家政、そんなに仕事はないんだよ。なんのために、こんなに人が集まってるんだろうと思つたねえ。

ずっと後になつて聞くには、ホントかウソか分かんない

いけど、そうやって人を集めれば、ホラ、食糧の関係が多いでしようよ。うだから、人を集めて配給米を多くするためなんだって言う人もいる。真意のことは分からないけど。

仕事もないのに、そんなに学童を集めて、いま大事な学業をねえ。勉強しなきゃなんない人たち。ぜんぜん勉強しなくていい。って、国が言うのなもの。つまり、わたしたちは、学徒動員令が解除になんなきゃ帰れない。

### 敵機がねえ。二〇〇とか

#### 三〇〇なんだよ

——毎日、毎日、空襲でしょ。毎日のように空襲があったのよ。そのたびに防空壕に走るのよ。防空壕まで三十分ぐらいかかるのよ。

行つた二月頃は、そんなに毎日ながったけども、三月になつたら、ホラ、三月十日、大空襲でしょ。三月に入つたら、毎日、昼も夜も空襲。敵機がねえ。一機や二機じゃないんだよ。二〇〇とか三〇〇なんだよ。カラスの大群みたい。

会社に行くんでしょ。朝ごはんを食べて、部署に着いて間もなく、仕事始めたと思つたら、

「ブワー」とサイレンが鳴つて、「あッ！空襲だ!!」「ホレ！逃げろ!!」って防空壕に行く。原っぱみたいな所を走つて行く。わたしは三十分と思つたけど、二十分と言う人もいる。わたしは走るのが苦手だったから、遠いと思つたけど。防空壕は、うんと大つきい防空壕。

B 29は、ずっと、高い所を飛んでる。ところが、グラマンっていうのが来るの。グラマンは小さくて低空飛行なの。それが、三月のいつだったか、それが来て。もう、わたしたちが防空壕に行く前に、もう、カラスの軍団みたいに来て。黒いのね。ワーワーと来る。

機銃掃射で撃つ。見上げると、顔が見えるぐらい低いんだよ。乗つてる操縦士の顔が見えるようで、なんだが笑つてるようで、しゃくにさわるけど、その中、走つて逃げたの。

不思議に、誰も当たらなかつた。働ぐどころじゃない。こういう事をサ、国の方針でやらした事が、おかしいじゃない。

だんだんに、特攻隊なんていうのは、人間爆弾でしょ。

ねえ。うだから、いまホラ、イスラムで、子どもに爆弾をつけさせて……。そういうのを避難するけど、考えてみたら特攻隊も同じだと思ふよ。同じ事をやったんじゃないかって、非難できないんじゃないか。わたしたち国民にもそういう時期があつた。

——統導の先生は、ものすごく責任感のある国語の先生だつた。女の先生は、いつの間にかいなくなつたがらいつかね。ホラ、横浜に家があるがら、日曜日に、「ちよつと、家に行つてくる」つて、行つたといふことは聞いているの。歸つてこないんだもの。

誰かがねえ。具合が悪くて早くね。会社から歸つてきた人がいたんだつて……。そしたら先生が荷物背負つてね。出掛けようとした所に会つたんだつて……。そしたら、とてもバツの悪いような顔だつたけつて……。

「あの時、逃げだんだよ」つて。(笑)

それも最近になつて、聞いた話。

そえでもね。男の先生はね。「生徒だちの状況をね。水沢の親ごさんだちが心配しているがら報告に行がせだ」つて、言つたの。女の先生を水沢に行がせだつて。

ホントにそうかもしれないけど、行つたかもしれないけど、後、歸つて来ながつた。とにかく。うだから、九十何人の生徒を、一人の先生が受け持つた。

### 上野駅での徹夜、

#### 切符は手に入らない

——そえで、やつぱり、その……。命をあずかつてきた大事な娘たちを、このままにしておいたら、皆、死んでしまう。ホントに、皆、死んでしまつたかもしれないよ。

そえで、どうやつて連絡したんだか。いまと違つて連絡網がない時代。なにもそれ、携帯もなければねえ。フックスもなんにもない。電話だつてねえ。とにかく一緒に行つた、「花中(花巻中学校)とか、「岩谷堂」とか。先生方と連絡とつたんだね。

そして、とにかく、逃げることにしたの。

だから、逃げるつていうかね。まず最初は、逃げるつて言われぬから。

あの……。会社の人に、「四月になつて、非常にあつたかくなつてくる。子どもたちは、冬服のまま来てゐるから着替えに一回帰らしてください」つて、言つたんだつて……。

それもねえ、ごつつい先生が、よくそれを考えたと思ふの、わだし。

女の子の着替えが……。というような事をねえ。女の人なら考えるけど。ホントに、ごつつい男の先生なんだよ。

許しの許可を得ようとしたら「ダメだ」つて言われた。断られた。

だつて、国の方針で行つてゐるが、会社も出来ないでしよ。

そえで、文部省の関係に行つてもダメだんだけ。ならば、脱走する外ないト。ということになつて……。

そえで、その……。切符、手配しなきゃいけないでしよ。その切符を買うために、上野の山で、上野で、あの……。なんていうか、行列作つてね。簡単にホラ、切符、手に入らない時だからね。そこで買う、買えるかもしれないという情報を先生が、あれ、得だんだつて。

そえで、ある日曜日、半分かな。わだしたち半分ぐらい、そつと、上野に行つたの。

半分は残して。みんな、行けば、ホラ、怪しまれるから、そえで、そこで徹夜して、夜明かしたけど、ぜんぜん、切符手に入らなかつたの。

そえで、残つた人たちはね。その……。怖い怖い寮母さんがいたのよ。寮の玄関の側に寮母さんの部屋があつて。知られると困るが、全員が、みんながいてみたに大騒ぎしてたんだつて……。それも後から聞いた。わたしたちは、徹夜しても、とうとう切符は手に入らなくて、ムダ足だつた。

その時にね。ひまでしよ。ただ行列でゐるの。そえで、わたしたちね。みんな、歌が好きだつたからね。「希望のささやき」なんて、合唱始めたのよ。そしたらね。なんだか、よそのおつかねえ、おじさんに、うんと叱られたの。

「いまどき、そういう歌をうたうのは何事だ！」つて、怒られたの。

それが、わたしの頭にある。いまこうして合唱してるのはそのため。わたしのレジスタンス。(笑)

こういう時代は、歌もうたつちやいけないんだつていうことが、すぐつく、頭にあつたから。いまね。わたしが一番、年上で、もう年下の人たちは戦争を知らない人たちもいるから。こういう風な事もあつたんだよト。

わたしたちはいま、こんだ、この歌をうたう。こんだはこの歌つて、自分で自由に選択をして、歌いたい歌をうたえるけど、こういう事に、何か、こう、外圧が掛かるようになったら、世の中、おがしいのだからね。つて言つてるの。わたしは、続けてんの。五十年近く。

そえでね。「退職互助会」がらね。なんだかホラ、会報出してるでしょ。そこに、「押切さんが長生きしている秘訣は、歌つてるからですか。その事を書いてください」つて、言われたから、いや、それが目的で歌つてるわけではありませんト。こういう風な事があつて、それがきつかけではあるけれども、まあ、歌つて呼吸法とか、声を出す事とか、そういう風な事が、健康につながつたというのは、結果論であつて、何も健康のために歌うつていうのはぜんぜん違います。つて書いてやった。

(笑)

これがあたりまえの事なんだつて……。

それまではねえ。なにしろ、ホラ、昭和四年に生まれ、六年に満州事変でしょ。それから十五年戦争のなか、ずっと生きてきてるから、わたしは、戦争中は、常に、普通であると思つてたよ。これがあたりまえの事だと思つてたの。

戦争が終わつて、戦争のない時代、これが本当の生活だと、その時になつて気が付いた。いかにあれが異常であつたかつて。振り返つてみて思うのであつて、その時は、わかんない。批判も出来なかつたしね。

## 五、六人ずつ、少しずつ

### そつと、部屋を出たの

—— 切符は買えなくて、そえで、騙されたつて、先生は、うんと、がっかりしたつて。

次の日、先生は、鉄道局に行つたんだつて。

そしたら、親切な人がいて、その人が手配してくれて、全員の切符が取れたつて言うの。

これも奇蹟的なことで……。そえで、その……。いよいよ脱出することになつただけ、ホラ、内緒で

行くのだから、消灯してから、寝てから、荷物を、お布団なんか縛つて。夜だな。五、六人ずつ、少しずつ、そつと、部屋を出たの。宿をね。出たの。とにかく、綱島の駅まで行くのに、三三五五ね。まとまって行くと分かるが。そして行つた。

これも後から聞いたんだけど、最後に、やつぱり、黙つて行くわけにはいかないから、先生は、こういうわけで、生徒の命を預かっている者としては、とてもあれだからというような事を言つて、寮母にね。怖い寮母さんで、そこで口論になつたけども、とにかく話した。

元住吉から、会社の人に乗つた。

「あの人、会社の偉い人のようだね」つて、誰かが言つて、みんな、下を向いていた。これは一巻の終わりだと思つたの。こりゃ、もうダメだと思つたけど、上野まで行つて、上野から東北本線に乗つて、ホットしたねえ。その時は……。

岩谷堂高等女学校の人たちは、駅に近くないがら、不便な道を逃れてくるのだから、堂々とこれないから、大変な思いをして、やつと、たどり着いたそうです。

### 先生が神様に見えだつて

——二月に行つて、四月に帰つて来た。

水沢の親たちが、いろいろな心配してるわけですよ。鉄道局に知ってる、なんていうの、手づる、そういう人を探して、結局、親だち騒いだわけでしょうよ。毎日、東京は空襲だつていうのに、娘たちが行つて……。それで、学校にいろいろ聞いたりして。学校でも国で決めだ事だから、あれでしょ。

——帰つてきて、そりゃ喜んだよ。みんな、先生が神様に見えだつて。手を合わせて拜んだつて。親だちが。命の恩人なわけだから。

わたしたちはねえ。誰も文句を言う人もない。

本当に、先生の言う事には、ちゃんと従つた。信頼できる先生だつたし、先生も一生懸命だつていうこと、分かるから、そういう先生だから、それで助けられたと思う。

うだなきや、脱走なんかしないんだもの。従わないもの。ホント、自分の首を掛けてやつたの。うだがら、ホ

ントなんていうか、わたしたちの命を守るためにね。自分の身を捨てたわけよ。

その、四十年近くたってから、やっとクラス会の時に、いま言ったような事情を、やっと、話したわけ。

その先生、菊池誠之先生。

わたしたちは、ホラ、家の人たちは知ってるけど、脱走してきた話など、ぜんぜんしながったの。だって、悪い事だから、その当時は喋らなかつた。

わたしたちは、荷物を置いてきたでしょ。そんなのもう、いらぬわけだよ。別に。

だけでも先生は、みんな、荷物を置いてきたからって、終戦後、荷物を取りに行つたの。大変な荷物でしょ。九十何人分。それを探すのも大変だつたよ。……運ぶのにも。もどつてきたんですよ。ちゃんと後始末ついてるか。責任感があつて……。だから、大変な思いはしたつたけども、それに耐えられたのは、やっぱり、信頼できる先生がいたからだと思うの。

## 今度は開墾

——脱走してもどつて来たけれども、学校には、もどれないのよ。だって、ホラ、動員令、解かれないもの。だからまた、軍需関係に行かなきゃならないの。水沢に疎開して来ている「中島飛行場」にいったの。うだつて、学校に行きたくても行けないもの。やつたのは、ジュラルミンに穴を開ける仕事。ドリルで穴を開ける。練習したけど、後は遊んでばかりいたの。

その当時、東京から疎開して来た人がいたの。そして、やっぱりね。東京も同じで、都立の高校だつたけども、中島飛行場で働いでらつて、言つてたよ。

——負けた日？きょうね。昼間、「大事な事があるから、庭に集まってください」と。言われて十二時に集まつたら、天皇陛下の玉音、そこで聞いたの。分がらなかつた。だって、音声がはつきりしないから。

大人の人たちは、泣いてら人もいたから、これは大変な事になったなあと、思つたの。

とにかく、戦争は終わったということだけは分かつた。

先生も一緒にいたよ。菊池先生もいたよ。その先生は、とても勉強家の先生だったから、国語の先生だったから、この子たちが勉強しないでサ。ジュラルミンの穴開けしたりサ。川崎の工場まで行つたつて、なにも飛行機も作ぐらないで、こうやって、日々を暮らすの、ホントに、なんていうのかなあ……。見るに見かねたような気持ちで、いま勉強しなきゃなんないのに、させられないわけでしょ。先生は、うんと悩んでたと思うよ。だって、なんにもしてないんだもの、さつぱり。先生は統導者で一緒にいてなきゃいけないしね。

——勉強は、すぐに始まらなくてね。今度はね。開墾に行つたね。鋤をかついで。そえでね。真城つていう所あるでしょ。水沢の南に。そこまで歩いて行つて……。何キ口あつたんだべ。昔、よく歩いたわね。鋤をかついで、そして開墾。戦後の方が食べ物が無い。戦中よりもつとひどかつたと思うよ。ソバを蒔いて。開墾ならいいけどもね、校庭まで耕したんだよ。校庭を耕すとねえ。せつかく固めた所だもの。鋤が跳ね返ってくるじゃないの。なかなか掘れない。そえでもそこにソバ蒔いた。

収穫したソバ粉を茶飲み茶碗一杯ずつもらった。それが収穫。一食分にもなんないでしょ。

——兄、帰ってきました。

終戦の前の年かな。寒くなつて、秋だったから。

もう、時間、おそくなつたから、寝ようと戸締まりして、雨戸も閉めて、みんな、寝ようとした時、雨戸を「ドンドン、ドンドン」叩く。開げで見たら、そこに、もう、シラミだらけの兄がいたの。そえでね。なんにも持つてないでね。復員した人つて、ホラ、毛布を持つて来たり、何だり、戦争資材持つて来たのに、なんにも持たないで、身一つで来たの。袋ぐらい持つてね。

何も言えないの。軍の秘密で。結局、そろそろ本土決戦になるト。それで本土の守りのために、何人か帰されたわけだ。

松の根掘りに行つたりね。松根油、飛行機かなんかの燃料にするんでしょ。

一生にとってのすばらしい一年

——学校の教室に入つて、「ああ、なつかしい」ど思つたね。教室はそのままだからね。

GHQの教育の、その……。なんていうの。指導があるわけだよ。アメリカさんの指導が……。

それまでは、女学校は四年生。中学校は五年生なの。そこに一年の差があるわけ。教科書も女学校はやさしいんだつて……。中学校よりも。その事は分かつたの。後からね。

そういう風な差別は最初からあつたわけよ。知らないのだから。

それで、あの……。GHQの指導で……。男女共学は、もう少ししたつてからだけれども、とにかく、男女平等で、女学校も五年制度になつたの。それが、もう、わたしたちには、とつては非常にいいことで。だけでも、入つた時は四年生で入つてから、親の都合もあるでしょうよ。だつて、女学校つて、ただじゃないんだもの。だから、四年生で終わつてもいいし、希望者は五年生まで入つてもいいということになつて、希望者は四十人いたの。半分ね。だつてその頃、女学校終わればお嫁に行つたんだもの。またそれ以上学校に入ると、嫁のもら

い手なくなるつて、言われでね。

でもわたし、入れてもらつたけどねえ。

——この一年が、わたしたちの一生を支配したつていうか、一生にとつて、すばらしい一年だつた。

戦争のあれがないもの。「戦争だからこうだとか」「国のためにこうだとか」つていう、上からの押しつけがないもの。自由に。たのしいも、たのしい。一生のなかで一番。だからその時の同級生が、いまでも集まつてる。自分たちで自由に。自由にとつても、まあ、たとえば、いままで出来ない事が出来て……。自主研修とかね。やつぱり、英語とか。

一年生で止めさせられたんだもの。二年生からは英語が出来なかつたの。

とつても、すばらしい先生に英語習つたの。一年生の時、そしたら、英語はダメ。敵性語だからダメだつて言われたでしょ。その先生、失職。職を無くすわけでしょ。そしたら、校長先生にね。なんでもいいから免許のないものでもいいから、やれと言われだつて。でも、その先生は、とても立派な先生で、「そういう事は、わたし

は出来ません」ってね。そしてね。あの従軍通訳でね。フィリピンに行ったの。女の先生。

その先生偉かったよ。その先生に教わった英語はよく覚えてるんだけど、あど、さっぱり覚えてない。(笑)

その先生の立場に立ってみてはね。自分は、自分の生涯の仕事として、一生懸命ね。女学校に勤めたでしょう。それが、国でダメだつて言われれば、なんぼ悲しがつたらうなト。

あのねえ。クリスチャン。クリスチャンだったもの。

いつもこう、焦茶色のワンピース着てね。髪をきれいに、こう、クシの目がきれいで、「お別れ会」の時ね。

ホントは学校で、その・・・送別会なんかするもんだけどね。作法室で、わたしたちだけ。教えられている生徒と先生だけで、お別れ会をしたの。

その時、先生が歌った曲が、また、すばらしいの。

「野バラ」を歌ったの。それをドイツ語で歌ったの。英語で歌っちゃいけないでしょ。

結局、先生は、終戦でホラ、引き揚げて来たの。最後の船に乗って来たんだって。みんなを世話して。通訳の仕事っていうのは、あの・・・向こうのアメリカさん

の将校とか、そういう人たちとも、つき合わなきゃいけないので、非常に大変だつて、先生言ったの。

引き揚げは、何回かに分けて、最後までみんなのお世話をして、自分は最後の船で帰つて来た。そしたら、その前の船が沈んだんだつて・・・。

佐藤信子先生。北上にもいた事があるとかつて・・・。お父さんが警察官で、あちこち転勤して歩いたみたいで・・・。

——「弁論大会」なんていうのがあつてね。

わたしは「婦人の参政権」のことを話したの。一等取つた。(笑)

「アプレゲール」なんて言われたけどね。

知つてますか。いいことじゃなかつたんだよね。

勉強もたのしがつたし、英語も出来たけど、音楽がホラ。あの時、上野駅で怒られたし、だいたい、学校で音楽の時間あつたけど、「海ゆかば」つて知つてますか。

「海ゆかば」知らないんだつて、いまの人たちね。うだつて、歌うこともないんだしね。必要もない。

「海ゆかば」とか、「君が代」と、あとは戦争賛歌の

歌、いわゆる軍歌っていうか、そういうのしか歌ってなかったのが、五年生になったらねえ。音楽の先生が、また、いい先生が来てね。

いろんな、その、外国のいわゆる世界の名曲。シューマン。シューベルト。ベートーベン。皆、そういうのが歌えたから、ホントに楽しかった。みんな、音楽の時間がたのしくてねえ。

ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」なんて、最後の「文化祭」で歌って・・・。

「文化祭」も初めて。だから、戦争になると、歌舞音楽がダメになるのよ。一番先にやられる。うだがらね。世界の名曲が歌える文化祭では、「美しき青きドナウ」を歌ったの。

(二〇一五年一月一五日/記録・小原麗子)

※GHQ — 連合国最高司令官総司令部

※アプレゲール — (フランス語で戦後。)

日本では第二次大戦後、既成のモラルに反逆した若者の風俗・犯罪に対して用いた。

△あとがき▽

## 「和賀の15年戦争」

小原麗子

「第30回千三忌」では、加藤昭雄さんが、「和賀の15年戦争」について、語ってくださいました。

「和賀の15年戦争」を語るとは「日本の15年戦争」(一九三一年△昭和六年▽の満州事変から、一九四五年△昭和二十年▽の敗戦まで)を語るに等しいという訳です。

その1・後藤野飛行場(岩手陸軍飛行場)

後藤野飛行場は、一九三八年(昭和十三年)建設され

ました。総工費、八万七千円。飛行場の道路は花巻との間、二一キロ、藤根駅との間は四キロです。

総工日数、百四十八日。青少年の勤勞奉仕は延べ十二万八百五十一人です。拡張工事、偽装工事など、勤勞動員は敗戦まで続きます。

一九四四年（昭和十九年）には、熊谷飛行学校後藤野分教所となります。特別操縦見習士官の訓練飛行場です。一九四五年（昭和二十年）、特攻訓練基地、特攻出撃基地になります。八月九日、（第二回釜石艦砲射撃の日）三機四名に出撃命令、二機三名は帰りませんでした。戦後、後藤野は開拓地になります。麗ら舎読書会の会員だった、折居次郎さん、ミツさん夫妻、小原照<sup>てる</sup>さんは、ここに入植しました。

99  
荒地です。まだ畑はなく、おつゆの実、漬物、煮付け、おひたし、すべてワラビ。生まれてくる子は、「ワラビのようにしびい顔」ではないかと、ミツさんたちは笑い合ったと言います。いま、広々とした水田が開け、工業団地も見えます。

## その2・国産軽銀岩手工場（黒沢尻）

一九三六年（昭和十一年）「国産軽銀原料工廠」が事業開始。一九三七年（昭和十二年）に岩手工場ができました。「福磐土（ふくばんど）」からアルミニウムを作る工場です。

ここで働いた佐藤幸吉さん（昭和二年生まれ）は、昭和十七年に入社しました。一万坪の敷地に十の工場が並んでいたと言います。

十五歳の幸吉少年は、少年航空兵に志願したのでしたが、身長ではねられ合格しませんでした。

その分、重労働で働かなくてはと思ったそうです。

昭和二十年の八月九日、十日、敵の艦載機が来襲、工場は破壊されます。従業員二名が死亡しました。

## その3・中島飛行機黒沢尻疎開工場

イ、中島飛行機株式会社は、一九一七年（大正六年）設立。日本軍機の五〇パーセント以上を生産する、日本最大の飛行機製造会社です。

中島飛行機三鷹研究所は、新型機の設計、試作を目的とし、一九四一年（昭和十六年）設立。翌年、一九四二年十一月には、「キ87」（B29迎撃用の高高度戦闘機）の開発を開始します。

一九四五年（昭和二十年）二月、試作一号機完成。が、資材不足のため量産は不可能となりました。

特攻専用機「剣（キ115）」の開発。あらゆる無駄を省いた小型爆撃機で、通常の二十分の一の工程で製作され、一九四五年三月、設計開始から三カ月で試作機が完成します。

口、黒沢尻疎開工場（一九四五年―昭和二十年春）「キ115」月産六十機を目標。

使用施設の学校は、黒沢尻中学、黒沢尻工業学校。江釣子国民学校、横川目国民学校、横黒館（芝居小屋）などです。

生徒の動員はなく働いたのは、一般の徴用工、女子挺身隊でした。

この年の八月末か、九月始め、一機の「キ115」が黒沢尻上空を飛ぶのが目撃されたといっています。

八、横川目地下工場は三箇所建設。

二千トンゴムプレス機工場です。このプレス機の高さは、六・四メートル。

第一号熱処理工場、第二熱処理工場。一九四五年三月から掘削開始、二百七十人の朝鮮人労働者が働きました。五年前、わたしも見学者の方たちと、その場所に行ってみました。木々や草におおわれ、穴に入ることは出来ません。幽棲、蝙蝠がいます。

#### その4・捕虜収容所と極東軍事裁判

田鎖助男さん（大正生まれ、藤根）は、仙台俘虜収容所第十分所（約三百人収容、ほとんどがイギリス人）の、現場班長でした。

一九四五年十二月、BC終戦犯として逮捕され、巣鴨刑務所に入獄します。自殺しようとはします。独房に入った一羽の小雀になぐさめられ、生き延びました。求刑は死刑。判決は重労働二十二年（十五年の減刑）。さらに講和条約で三分の一に減刑。一九五三年（昭和二十八年）七月に出所、帰ってきました。もう一人のSさん

(判決、重労働十五年、減刑十年)も帰郷します。

### その5・高橋峯次郎と平和観音堂

高橋峯次郎(一八八三年―明治十六年生まれ、一九六七年―昭和四十七年没)は、やはり、麗ら舎読書会の会員、だった高橋フサさんの祖父です。二十歳で小学校準訓導になり、明治四十三年、二十七歳でボーイスカウトの前身である、「藤根少年眞友会」を設立します。

一九〇八年(明治四十一年)二十五歳の時に「眞友」を発行。この通信は戦地の兵隊宛に送付されました。一九四五年(昭和二十年)までの三十八年間、通算一八二号まで発行します。

「眞友」を読み、戦地の兵隊からは軍事郵便が届きます。その数、七千通以上です。

その手紙はいま、「北上平和記念展示館」に展示されています。

峯次郎は戦時中、青年たちに体を鍛えるようにと指導し、軍隊への志願も勧めました。

戦後は、戦死者の家を訪ね謝ります。

一九五二年(昭和二十六年)「平和観音堂」を建てます。観音菩薩は、兵士たちが戦地から送った土で作られました。罪のつぐないが、込められているのでしょうか。

### その6・千三忌

高橋セキさん(一九六六年―昭和四十一年七十四歳で没)は、母一人子一人でした。

一人息子千三は、昭和十九年ニューギニアで戦死、数年二十四歳でした。

セキさんは十年間、農作業の手間取りをし、蓄えたお金で千三の墓を建立します。

墓石には「南無阿弥陀仏」と刻まれています。セキさんは生前、次のように語っています。

「オレ死ねば、戦死した千三思い出してくれる人もなく、忘れられちゃうべと思つて、人通りの多い道ばたさ建てたス。その道通つた人たち墓石みで、戦死したムスコの千三を思い出してける(くれる)ベエ。お念仏もとなえてくれる人もあるべし、知らねえ人でも、戦死者の墓だと思えば、戦争を思い出すべなス。」(小原徳志)

編『石ころに語る母たち―農村婦人の戦争体験―』一九六四年―昭和三十九年、未来社）。

わたしたちは、セキさんの意志を汲み、毎年、千三の命日の前後に「千三忌」を持っています。今年で三十回になりました。

戦争のある所、セキさんと同様、息子を亡くした母親がおります。

アメリカのシンディ・シーハンさん（二〇〇五年―平成十七年、四十八歳）の息子、ケーシー陸軍軍曹（二十四歳）は、イラクのバクダットで殺害されました。シーハンさんは、ブッシュ大統領（当時の大統領）に、「なぜ、戦争を始めたのか、なぜこんなに死ななくてはならないのか」と、訴えます。

この六月二十七日、二十八日、水沢Zホールにて、劇団「Zの風」（代表・渡部明）により、「千三の墓」が公演されます。

作・上田次郎、演出・渡部明。

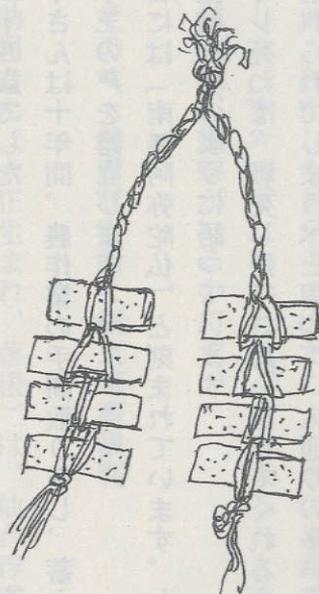
戦後七十年、セキさんは舞台から何を語るでしょうか。

（了）

参考・加藤昭雄「和賀の15年戦争」

岩手・和賀のペン編『農民兵士の声がきこえる』（日本放送出版協会）

子に餅をワケて居る



〒 024-0333

別冊・おなじ No. 33号

15年3月31日発行

岩手県北上市和賀町長沼5の343の3  
麗ら舎読書会

TEL 0197-73-6673



